

辻村篤

字は敬甫、通稱移仲、松溪と號す、國友村の人にして、前記せし辻村修の弟なり、性活潑氣概あり、奇行多し、一旦分家せしも、塵俗の事を厭ひ、宗家に同居して、常に文學を友とし、遠近の名家と交遊す、小野湖山、大岡廉平兄弟、太田翠巖等は詩文唱酬の親友たり、尾張藩明倫堂の教授秦鼎は其師なり、文政三年六月十六日、鼎翁、安田、杉田、山邨等の門生を從へて、國友に來り、姉南園に遊ぶ、姉南園は辻村氏の園名なり、翁時に姉南園の記を草す、當時篤は大岡子禮、太田翠巖等と共に翁を奉じて、竹生島に遊びし事、其遺稿に見ゆ、篤勤王の志厚く、嘉永六年米艦の浦賀に來り、海内騷擾、物議競々たりし時、堤佐仲、大岡廉平等と共に大に時事を論ず、篤が當時の作に左の詩あり、

萬古吾王無革命、不知漢土淪他姓、
 四夷戮力饒相謀、豈可此邦來得勝、
 神州寶劍鎮呈奇、聖化遍敷壯武貔、
 賊艦休來々遇颶、應同蒙古敗軍時、
 曾伐三韓幾代遷、彼亡兩度我兵全、
 寄語農夫商賈輩、相逢莫痛畏夷船、
 氣慨追想すべし、篤又金澤尾張町の人、唐物屋延平の紹介により、賴三樹と交り（賴三樹は當時京都鉄屋町御池下所に住す）意氣相投す、三樹曾て國友に來り、篤の家に投じ、時事を論じ、詩酒痛飯せり、篤安政三年十二月十七日卒す、年七十七、著はす所、鷄肋詩集五卷、蓬垣和歌集一卷あり、

り、

堤佐中

南方村の人なり、初め泰藏と稱し、後佐仲と改む、篁亭又百返舎と號す、始め醫を尾張國津島足立圓庵に學び、傍ら詩文を同地の儒某に問ふ、業就り郷に歸りて、醫名藉甚たり、時に江北の地文學の士多く、文を論じ、詩を鬪すの同士濟々たり、大岡松堂、同子栗（曾根）、太田翠巖（村）、辻村松溪（國友）、三上主水（大路）、中川耕齋（戌亥）、沓水文内（長濱）等、莫逆の友たり、又下坂中村より出でし、淡海槐堂、江馬天江等と肝膽相照せり、安政、萬延の頃、尊王攘夷の論鬱然として起り、天下の志士勤王の大義を唱ふに方り、佐仲等同志の江北の志士は、名を詩文の會合に藉りて尊攘を論じ、天下の志士と相結びたり、然れども、彦根藩の戒嚴周到なれば、他の諸士は郷を去りて他國に出でしが、佐仲は家事の許さるるありしを以て、在郷して業を執り居たり、されど勤王の思想は同志の間に知らるるを以て、身を置くに所なき浪士は、遠く佐仲を尋ね來りて其家に寓し、難を避けしもの少からず、萬延元年三月、井伊直弼が櫻田門外に殺されし時、佐仲は左の述懐を詠じたり、

四海憤然嘔墨夷、清平士氣等嬰兒、
 十年唯恨天誅晚、雄斷新傳太老時、
 井伊氏の提封たる村内に住すれば、己れの爲には領主なる直弼の横死に際しては謹

愼すべき時なりしも、直弼が終始佐幕に勞し、或は戊午の大獄を起し、或は勤王の同志を殺害せしを以て、年來の鬱憤は溢れて此言を爲せしなり。

文久元年長州の藩士等譴責を被りし後、同藩士松田退一竊に來りて佐仲の家に隠れ、文雅の遊客と稱し、在ること一年有餘、同二年十月十七日、退一偶長濱町に出で、酒樓に飲む、衛吏其浪士なるを察し、之を捕ふ、佐仲報を得て走りて長濱に至り、退一の爲に辨疏し、終に事無きを得たり、然れ共爾後彦根藩吏は退一の行動を怪み、遂に退一を縛し、之を美濃の國境藤川村の東に送致し、同時に佐仲に閉門を命じ、謹愼せしめたり、當時佐仲は慷慨に堪へず、筆を揮ふて竹を書き題して曰く、

至剛將至直、爲箭又爲弓、何日射、姦賊清風腕底雄。

慶應二年十月、江馬天江等と碧嶽樓に會飲し、時事を論せし時、左の詩あり、

世事紛々不耐論、憂懷相慰對青樽、繞樓山色只依舊、誰識詩成涕有痕。

佐仲が勃々たる愛國の思想は、以上の詩中に溢る、慶應四年四月二日病で卒す、年五十

淡海緝

槐堂と號し、下坂氏なり、文政五年十二月一日、下坂中村に生る、父篁齋は徂徠派の儒者

にして、類聚言數十卷を著す、緝人と爲り、硬直氣節を尙び、弱冠にして家を辭し、京都に出で、武田氏の跡を繼ぎ、醍醐家に仕へ、板倉の姓を賜はり、筑前介に任じ、從六位下に叙せらる、幕府の失政天下多事の時に當り、諸藩勤王の士と交り、時弊を痛論し、脱藩の士を招集し、洛東日吉山に演武場を設けて武を講じ、旁ら文を學ばしめ、勤王の志士を鼓舞す、是時天誅組激烈の運動をなし、異國と交通貿易するものは誅殺すと揚言す、偶、江州の商人丁字屋吟三郎交易し、巨利を博すとの説あり、天誅組の徒其形跡を搜り誅殺せんとす、緝之を諭して曰く、獻金して朝廷の費用を助くるも亦勤王の一端なり、宜しく金圓を以て罪を贖はしめんと、依て其事を謀り、壹萬圓を獻せしめて事已むを得たり、文久三年八月十八日、三條公以下六卿長防に奔らんとす、依て糧食金品を贈り、三條公には甲冑を供し、所部太郎の依頼を受けて、土藩に謀り、長藩の彈藥を補給す、同年九月吉村寅太郎等義兵を擧ぐ、緝乃ち銃砲數十挺、並に軍資を送りて、其擧を助く、元治元年六月五日、同志の土宮部鼎藏等、三條池田屋にて襲撃せられ、殆ど皆其場にて鬪死したるに、土藩士藤崎某微傷を負ひて遁れ來りければ、則ち潜居せしめ、劍を治して去らしむ、同年七月十九日、葦下擾亂兵火四方に起りたれば、家族を率ひ、本郡の郷里に難を避け、本郡の志士に勤王主義を鼓吹す、八月九日京都に入りしが、翌十日京都西

町奉行瀧川播磨守に捕はれて、六角の獄に墜がる。其獄中に在るや、紙捻を筆に代へ、萬金丹を墨に當て、詩歌を詠せり、其一二を掲ぐ、

朝聞父兄訓、夕暮聖賢風、今日果何咎、幽囚在獄中、

君のため國の爲めにと盡す身の仇に報いる秋にぞありける

在獄三十三箇月にして出づ、同年十二月三條公歸洛し、特使を以て鶴衣一領、並に自詠を賜はれり、其歌に曰く、玉鉞の道なき世にはこれを着て暫く時を待つべかりけり、毛利侯より感謝狀並に米拾五俵を與へらる、是れ嘗て長藩の爲に盡したるに依りてなり、戊辰四月醍醐家を辭し、板倉の姓を返上して、淡海と改め、同五月巢内式部等と謀り、志士の遺骸を洛東鷲尾山に改葬し、自ら墓名を記して碑を建つ、是を靈山招魂場の嚆矢とす、是より先大津裁判所參謀仰附られしが、是に至て裁判所を廢し、大津表縣令所と改めたるを以て、參謀を免せられ、左の賞典を受く、

積年報國之志神妙之至りに候、依之五人扶持終身下賜候事、

明治二年三月十日

行政官

明治三年待詔院下局申附らる、程なく辭し、金貳百圓を賜はり、次で京都府士族となり、内舍人權介より宮内中錄に進みしが、思ふ所ありて位記を返上し、槐堂と號す、爾來風

流韻事を以て自ら樂みしが、明治九年二月、嶋津久光公建白書を上りて左府を辨するの時、嫌疑を蒙り、中沼了三、高島六三及び男弘義子漁人と共に二條城に拘留せられ、尋で赦さる、十一年十月十六日、明治天皇京都行幸の時、天機伺として皇居へ參上すべき旨に接したれども、宿痼癒へざるを以て、天顔を拜するを得ず、爾後病益、革り、十二年六月十九日溘然として歿しぬ、壽五十八、山城國愛宕郡岡崎村に葬る、歿後十三年を経て、宮内省より勤王の志篤く國事に盡力せし段奇特に思召さるゝの旨を以て、祭料金五拾圓御下賜あり、年忌に相當するを以て薦事を行ひしに、久邇宮殿下を初め、多くの貴顯の奠物あり、紳士紳商雅人等の來會せしもの貳百七拾名、以て瞑すべし、明治三十六年十一月十三日、朝廷生前の功勞を賞せられ、特に正五位を贈り給ふ、

江馬聖欽

天江と號す、文政八年十一月三日、下坂中村に生る、板倉槐堂の弟なり、幼にして讀書を好み、才名あり、弘化三年大阪に赴き、江馬金粟に就きて醫學を學び、江馬榴園の嗣子となり、醫を業とす、嘉永元年再び大阪に赴き、緒方洪菴に従ひ、洋學を修し、同二年眼科方劑書等數部を詳述す、同六年米使浦賀に來り、天下騷擾し、尊王攘夷の論大に囂し、則ち各藩の志士と交り、國政を論ず、是より先き梁川星巖に就て詩文を學び、詩名夙に顯は

れしが、梁川翁に關したる嫌疑嚴重なるを以て、家宅を搜索せられしも、幸に證據を發見せられず、事なきを得たり、元治元年九月、長州の藩兵入洛し、會津藩士火を市街に放つ、此時家兵火に罹りたれば、亂を避けて江州常樂寺に來る、其後中兄槐堂幕吏の爲獄に在ると聞き、再び上京して牢獄を訪ひ、又は會藩と交渉の任に當りたれば、嫌疑を受くる事深し、王政維新の後、徵士を以て召されて、史官に任ず、明治天皇御即位に際し、衣冠笏履を賜ひて大典の列に加へらる、當時史官の職たる諸藩の罰文、檄文、御沙汰書より議定官の議事録、北越戦争報告を日誌に登載し、兼て總ての文體を新定する必要ありし爲め、常に筆生百餘人を督し、繁忙を極む、徹夜する事少なからず、其詩に曰く、

叨列史官編姓名、蓬頭野服接簪纓、簿書滿案投響急、一生文章誤此生、

と、遂に期年にして職を辭す、其時の詩に、

養將夜鶴飽杭糧、頂似丹砂翎比霜、畢竟彫龍馴不得、海天萬里任飛翔、

と、其後木戸孝允より再任の勸誘に接したれども、再び起たず、蓋し官位卑きを慨すればなり、即ち居を東山に移し、後進に教授す、明治十四年柳馬場に宅を購ひて移る、前庭は退享園と稱し、小堀遠州の作と傳ふ、其結構布置尋常ならず、是より詩酒優遊逍遙自適、以て老に至る、賞心贊錄四冊、古詩聲譜二冊、退享園詩抄二冊あり、後病を得て終に起

たずと、小野湖山同書に序して曰く、

翁吟骨清癯美鬚髯、絳々然として垂て膝に至る、特に境遇の詩に適するのみならず、而も風裁辭氣一として詩人ならざるはなし

と、以て翁の人となりを知るに足る、病むこと四日にして歿す、享年七十七、東山高臺寺の先塋に葬る、此日會するもの富岡鐵齋以下詩人數十名、谷如意は莫逆の友なるを以て、墓誌を囑せしも、如意亦病褥に在りて管城を役する能はず、小林卓齋によりて墓誌銘成る、

銘曰

天賦清質、江漢濯之、青雲有路、非君所思、高懷寫生、幾百篇詩、芳名不朽、千秋可期、

林兵左

藤川村の人なり、徳川氏の世、其家驛傳の事を掌る、氏は天保十年を以て生れ、長じて温厚、入りては家業を勵み、出ては藩主(井伊)に仕ふ、幕末國論鼎沸するの時、氏は勤王の士伊藤俊助(博文)、山縣大貳、西郷吉之助(盛隆)、車戸造酒等と交り、京坂の間を奔走して、大に義舉を賛く、慶應三年十二月、大原重實卿義兵を擧ぐるに當り、氏は盡忠報國の赤誠溢れ、

巨額の軍資を献納し、或は東奔西走、其舉を賛けたり、故を以て明治三十五年十二月、伯爵大原重朝卿より當年の功勞を追賞し、木杯一組を贈與せられたり、蓋し氏は明治三十五年九月十四日、六十四歳にして病歿せるを以て、嫡男繁太郎氏之を請く、其賞狀左の如し、

滋賀縣坂田郡春照村大字藤川

亡林兵左男

繁太郎

慶應三年十二月、王政維新に方り、父故重實の義兵募集に應じ、爾來國事に盡瘁したるを以て、此回父に代り之を表彰し、紀念の爲めに此盃を贈與す、

明治三拾五年十二月

正三位伯爵大原重朝

松浦七兵衛

七兵衛の二男なり、天明二年八月、柏原村に生る、家世々賣艾を業とす、七兵衛弱年にして氣慨あり、年二十奮然として曰く、舍兄家に在り、父祖の業以て繼ぐべし、予次子と雖も豈徒に兄の業を助くるを以て足れりとせんや、今より伊吹艾を以て一家を興さん

と、自から商號を龜屋佐京と名づけ、多量の艾を積み、江戸に行商す、沿道艾を賣り、江戸に達するの日、既に若干の利を獲たり、則ち吉原の遊里に遊び、屢々豪遊を爲し、得る處の利價を散じ、大に妓輩に知らる、一日妓輩に謂て曰く、我は膽吹山下の艾賣なり、日々獲る所を以て汝等に散ず、汝等其れ我爲めに盡すの心なきや、妓輩曰く、敢て妾等にして爲し得るの事盡さるの理あらんと、七兵衛曰く、良し、然らば汝等に語らん、我宿志あり、伊吹艾を廣く世人に知らしめんとす、汝等今より他の遊客の席に倍するの日、酒歌管絃の間、伊吹艾の歌を加ふ可しと、妓輩欣諾す、其俗歌左の如し、

江州柏原伊吹山の麓龜屋佐京のきり艾

幾くもなく艾歌都下に普及し、盛名を博し、賣艾に便を得、大に利益を占めたり、既にして郷に歸り、文化六年八月、獲る所の金八百九十五兩を投じて、五十五箇所の田宅を一括に購ひ、家屋を建て、園を築き、盛に業を勵む、同十一年二月、媒人あり妻を迎へしむ、是れより先き里人と貸借の私紛あり、里人之を銜み、華燭の典を擧ぐるの夜、大に狼藉を極む、七兵衛婚儀了るの日、京師に出で直に梨園弟子と結び、里人が艾店の盛なるを妬み、狼藉を爲すの狀に脚色せしめ、之を劇場に演せしめ、又大に伊吹艾の盛名を博するを得たり、其他賤藝者の此地を過ぐるあれば、必ず過分の施與を爲し、約するに其藝歌

に伊吹艾の事を交へしむ爲めに益々名聲を傳へ、獲る所甚だ多し又軍中散と稱する
疵薬を製して發賣す購ふもの多し、

此の如く七兵衛は奇抜なる廣告を爲すを以て、伊吹艾を天下に知らしめ、其行商に利便を得たりしが、今は其本居の邸宅を美にし、坐して往還の士人を引くの策を講せり、彼の往時に於て中仙道の名所と稱せられし柏原龜屋の庭園は即ち是なり、彼の園前後六回改築し、投ずる處の費二千金を越ゆ、其最も人數を要せしに至りては、一年二千人を使用し、用ゆる處の大石遠く美濃の牧田より運び、一石六十金を費せり、又其の庭園に臨みて藏六亭を築けり、侯伯士人より庶人の此地を通ずる者、皆亭に憩ひ、園を賞し、艾薬を購ふ、是に於て終に素志を貫き、樂しく餘生を送りしが、嘉永三年病を以て歿す、年六十九、

馬場彌五郎

鳥居本村大字鳥居本の人なり、正徳五年三月年甫めて十五、江戸に出で坂田屋呉服店に仕ふ、居ること十數年、精勵恰も一日の如く、主家の信用頗る深厚なりき、一日主人彌五郎に語りて曰く、汝の精勵實に感ずる所なり、汝將來何を以て世に處せんとする乎、余亦汝の爲に助成するところあらんと、彌五郎喜んで曰く、不肖熟ら顧ふに商利を獲

んには、需要と供給との關係を詳にするにあり、今や合羽の需要は多く、而も供給は之に伴はざるを認むるのみならず、將來益々需要の尠からざるを知る、故に不肖の望むところは今より歸國此が製造販賣を營業せんとすと、主人も亦之を賛し、乃ち若干の資と坂田屋なる自家の商號とを授け、遂に其意に應せり、彌五郎欣然として國に歸り、其業を開く、時に享保五年十月なり、彌五郎固より精勵の質年を逐ふて隆盛に趣き、其の販路の如き頗る廣く、隨つて利潤尠からず、盛に一家を興し、主人の厚意に報せりと云ふ、彼の櫻田の變浪士の着用せし合羽の如き、盡く坂田屋の製造にかゝるものなりと、爾後本村此業を營むもの漸く、其數を増加し來り、今や十數戸の多きに及び、其賣上金額の如き、毎年幾萬と稱し、裕に本村の一物産に至りたるも、全く彌五郎創業の賜と云ふべきなり、

下郷傳平

天保十三年十二月を以て長濱田町に生る、祖父の時より漆の製造を業とせり、父傳右衛門に至り、家道大に衰ふ、傳平此間に生長し、具に辛酸を嘗む、年十五父に代りて家政を整理し、十八歳の時より京都、大坂に來往し、古器物を蒐集して之を轉賣し、稍々産を得たり、十九歳の時米商を創むるに至り、家名漸く振ひ、事業駁々として進む、維新の後

油商を兼ね、明治十六年大坂製紙場を購ひて、下郷製紙場と改稱し、明治十九年近江製紙會社を長濱に設立し、又長濱銀行の頭取たり、其他大坂、長濱等に於ける會社の重役を兼ねる事、前後三十有餘、嘗て海防費を獻納して、銀製黃綬褒賞を賜はり、從七位に叙せられたり、明治二十三年帝國議會の開かるゝや、多額納稅者の互撰により、貴族院議員に勅任せらる、在職七年専ら力を院議に盡し、殊に商法實施の延期説を主張し、又議員の歳費全廢案を議場に提出せし事ありき、明治三十一年病に罹り歿す、享年五十七、傳平病床にありて其起つ能はざるを知るや、後事を處して秩序紊れず、其當に受取るべき生命保險金二千圓を舉げて、賑窮並に公共の事業に投せんことを遺言せり、而して傳平が生前公共事業に盡したる事亦尠からず、日本赤十字社、佩有功章特別社員として、滋賀支部に幹事たるの外、滋賀縣尙武義會、其他各種の團體に讃同し、橋梁を架設し、道路を修繕し、又天災地變あるときは常に錢穀を散じて、無告の窮民を賑す等を以て、賞盃を受くる事、前後數十回、殊に教育を重じ、諸生を撰抜して東京に遊學せしめ、社會のために人材を造るを目的とせり、

淺見又藏

長濱町の人なり、天保十年八月を以て生る、資性純朴にして、華美を衒はず、常に勤儉を

守り、能く生業を勵み、家産増殖富巨萬を累ぬ、然かも公共の事業には屢々巨財を散じて、少しも吝まらず、郷黨隣閭の最も尊重する所となれり、又藏與りし業務頗る多く、就中第六十四國立銀行頭取、太湖汽船會社頭取、農工銀行設立委員等は、其重なるものにして、又衆望により、長濱町長たり、明治十七年赤十字社設立の主旨につき大に感ずる所あり、直ちに同社員に加盟し、室靜子と相謀り、益々勤儉し、毎年歳首に至れば金百圓を赤十字社に寄附し、名づけて初穂といふ、此事小松宮殿下の聞かせ給ふ所となり、明治十九年三月、辱なくも賞狀を下し賜へり、同年十一月博愛社病院開院式舉行に當り、佐野副總長の奏上により、畏くも亦 皇后陛下の獻聞に達し、陛下には淺見夫妻の如きは、よく國民の義務を知れる慈仁一對の徳義者なりとて、深く殊勝に思召させ給ひて、叙感の御言葉を洩せ給へり、明治二十八年四月、日本赤十字社滋賀支部設置に當り、幹事を囑托せられ、同二十九年七月更に會計監事となり、以來大に支部の經營に參畫したり、又藏は年々赤十字社に百圓の寄贈をなすの外、天災地變ある毎に、巨額の金圓を以て救護の資を幫助し、又夙に教育を重じ、長濱小學校新築中へ一萬金を投ずるに至れり、又藏三男五女あり、嘗て人に語りて曰く、男子は身を以て國家に致すを得と雖、女子に至りては則ち然らず、故に宜しく赤十字社の事業を助け、獻身奉公の義に代へ

しめざるべからずと、偶々二十七八年の事起るや、五女をして各々金百圓を赤十字社に納めしめ、各終身社員に列せしめたり。室靜子頗る堅實にして、能く家政を治め、又屢々大金を投じて、救護費及び病院維持費を助け、殆ど夫に譲らず、是れを以て日本赤十字社は二十年十二月十九日、又藏を特別社員に推薦し、二十一年十月有功章を贈與し、二十七年二月靜子を特別社員に推し、二十九年六月有功章を贈與し、以て拔群の篤志を表彰せり、又藏曾て海防費を獻じて、銀製黃綬章を賜はり、從七位に叙せられたり、明治三十三年四月病で歿す、年六十二。

西川徳重郎

長濱町の人にして、世々鑄物を業とす、前記西川治兵衛の裔なり、幕末の時藩主井伊氏の御用鐵砲師を命せられ、盛に之を鑄造す、又藩命により京都に出張して、鐵砲を鑄造す、藩主其功勞を賞し、姓の公稱(苗字)を許し、紋附社袴、其他種々の賞を請く、當時の文書に右は御筒鑄立に付、出張御用被仰付候處、大切之御用骨折出精實體に相勤候に付、爲御褒美、件之品被下置候、以上とあり、其他藩政に功勞ありしを以て、賞を受くる事十數回に及びし事、現存の文書に見ゆるも、之には是を省く、明治維新の際より維新後公共の爲に盡瘁せしこと頗る多

し、之を概記すれば、

- 一 明治二年四月、彦根藩長濱居住兵卒の長屋普請掛り被命、
- 一 同年十二月、長濱町中年寄兼副教諭申附らる、
- 一 同年五月、社倉用掛り、十一月會計局用掛、十二月長濱商社取締役申付らる
- 一 同四年五月、長濱町大年寄兼教諭役申附らる(以上彦根藩廳)
- 一 同年七月、長濱町小學校用掛り申附らる(彦根縣)
- 一 同五年二月、庶務課勸業掛り申附らる(長濱縣)
- 一 同年勸業會社幹事兼取締役申附らる(同)
- 一 同年四月、長濱小學校用掛り是迄通り申附らる(天上縣)
- 一 同六年四月、坂田郡第十六區第十七區副區長兼勸業申附らる(滋賀縣)
- 一 同八年二月、益種副總代申附らる(同)
- 一 同年五月、當縣等外二等出仕申附らる(同)
- 一 同年五月、租稅課附屬申附らる(同)
- 一 同十一年一月、坂田郡第十七區副區長申附らる、同時に十六區副區長兼勸業申附らる、

一同十二年三月、本年徵兵議員申附らる(同)
 一同年六月、坂田郡書記相當十七等に任せられ、第二部事務の取扱を命せらる(同)
 一同十三年八月、長濱町戸長申附らる(同)
 一同十四年八月、開知學校學務委員兼任を申附らる(同)
 一同十七年五月三十日、滋賀縣會坂田郡補缺議員に當撰、
 徳重郎は又公益慈善の心に富み、明治五年長濱町の大火に際し、勸業社の諸氏と謀り、種々の方法を講じ、罹災の人を救助し(此事別記)學校の新築に際しては、熱心事に盡し、新築費四拾圓を寄附せしを以て、明治十年縣令龍手田安定より木杯を下賜せらる、同十二年虎列刺病流行に際し、豫防費として金拾圓を寄附し、同縣令より木杯一個を賞せらる、同十六年十二月、長濱警察署建築に際し、金貳拾圓を寄附し、木杯一個を賞せらる、明治十七年三月、宮内省より左の賞狀を下賜せらる、

滋賀縣平民

西川徳重郎

明治六年 皇城炎上ニ付、金五圓獻納候段、奇特候事、

明治十七年三月十八日

宮内省印

同十八年開知學校學資金として金百圓を寄附し、三月二十五日縣令中井弘より、三組木杯一組を賞せらる、同年貧民救助として金拾五圓を寄附せしを以て、木杯一個を賞せらる、同二十一年滋賀縣廳舎新築費に金拾圓を寄附し、木杯一個を賞せらる、此他町役場新築費、橋梁費等に寄附し、貧民を救恤し、罹災民を救ひし事頗る多し、明治三十四年五月十六日卒す、年五十九、

川崎顯成

川崎村圓教寺の僧なり、澹崖と號す、始め伏見關影院の門に入り、學を修む、又詩を梁川星巖に問ひ、書を前田暢堂に學ぶ、大學寮を出る後郷に歸り、私塾を開きて門生を教授せしが、本願寺の召により出て仕ふ、塾生惜別の情に堪へず、相謀りて瘞筆の碑を建つ、宮原本石碑辭を書す、曰く、

澹崖和尚津梁餘力、講究外典詩文書畫、無不善焉、頃及門弟諸子相謀、欲刻石以傳其德業之美、石既琢、和尚不許、請其平生所用之廢毫若干枝、改命瘞毫碑、會余自京都歸、迂路于川崎、訪和尚、和尚與諸君囑以詩併記其顛末、乃賦長律一篇、

辭曰 登壇幾度奏殊勳、毛穎諸孫自絕群、風月場中馳逸氣、丹青國裡發奇芬、跳龍奔

驥十年跡、春草秋煙三尺墳、稽顙聊供香一瓣、猶思盤礴勢凌天、

木石道人宮原壽誌

かくて顯成は海外布教を命せらる、明治七年清國上海に航して布教せしが、偶々品川領事の力を添ふるあり、遂に一堂を建築す、所謂上海別院之なり、滯留三年にして歸朝す、豊後の僧五岳詩を賦して、其成功を祝せり、同十四年佃嶋監獄の教誨を始む、本邦監獄教誨の嚆矢たり、後特派傳道使となり、全國各地に巡錫す、晚年眞宗大學教授並に教道講習院教授等を勤績し、弘教の爲に奔走すること前後五十年、明治四十年權大僧都に補せらる、四十二年病革まると及び、特に大僧都に補せらる、幾もなく卒す、年八十二、賦詩卷を爲し、揮書世に賞せらる、

平川昌信

帶刀と稱す、字昌信、鳥居本村の人にして、式内山田神社の神官たり、爲人客氣旺盛にして、博學強記、廣く天下の志士と交はる、最社寺の混交を慨し、國史の因て來る所を説き、神社の神聖なる所以を論じ、貢獻する所尠からざりき、

翁はもと甲斐國中巨摩郡下宮地に生る、幼にして父正重に就きて學び、長じて平田篤胤の門に入り、深く造詣する所あり、明治元年出で、諸國を遍歴して、神社の由緒を調

査し、或は止まりて敬神愛國の道を講じ、或は帷を垂れ、神官を集めて教授せり、後遂に鳥居本村に移住し、山田神社の神官に就職せり、當時該社は荒廢其極に達し、社僧ありて之を崇拜し、僅に一縷の命脈を維持し、殆ど神社としての壯嚴なし、氏子亦崇拜の念慮殆ど之なきが如きの觀ありき、是に於て翁は毎月十五日人民を社務所に集め、報本反始の道を講じたりしが、人民神社の尊嚴なる事を知り、大に翁を助け、廢れたるを興し、弛めるを張り、祭禮の儀式より社殿の設備等に至るまで、燦然觀るべきに至れり、今や普通の民家にありて、佛敎を信するもの家に燦然たる佛壇を安置し、神壇の設けなきもの比々皆然り、獨り鳥居本村にありては、却て神壇に重きを置けるもの尠からず、且つ一般に敬神の美風甚だ厚きを視るは、全く翁が感化薰陶に由るなり、翁國學の造詣深くして、神職の故事に精通せるを以て、湖北六郡の神官にして、贊を執り敎を受けざるもの殆ど之なきに至れり、嘗て淺間神社(駿河)、多武峯(大和)、阪本、多賀、長濱(近江)等に於ける翁の筵に入れる門人を加ふれば、實に數百人の多きに及び、翁は權田直助、西川吉輔等と交はり、國事に奔走せる事尠からず、而も翁の功績は隠れて顯はれざりき、蓋し時に不遇なる所ありしによるか、當時の述懐に曰く、

老木にも花咲くものを白雪のつもるばかりの身こそやすけれ

と翁著す處の天地夜見開關十圖、古傳説畧等あり、國學祭祀等の未編稿本に至りては甚だ多く、以て翁が教育敬神愛國等に盡せる一端を知るべし、晩年犬上縣廳より神官試験委員を命せられ、大坂鎮臺第一分營より神葬祭係りを申附けらる、翁父母に仕へて至孝、子弟を誨へて倦まず、常に曰く、父母は我が根元なり、報恩の道須臾も之を忘るべからず、子弟は我業を奉紹するもの、教育に意を用ひざるべからずと、又曰く、世人は有形の財産を重んづるを知る、而かも無形の財産の一層貴きを知らず、宜しく有形の財産と共に、深く無形の財産の蘊蓄を怠るべからずと、翁明治八年四月十八日、溢焉幽界に入れり、享年六拾四、門弟等曆集し碑を立て、功を勸せんとせしも、息開利之を辭し、自ら石を鳥居本の郷宮田の丘の塋域に立て、題して曰く、平川昌信言平和魂彥墓と、蓋し功を勸するは却て先考の徳を汚さんとの意に出でたるなり、

翁博愛の念深く、常に祭祀の供物并に祈禱料を人に配與するを樂みとせり、嘗て甲斐の國に在りし時、飢民に菜色あり、是に於て翁は無數の籠に白米三樽（甲斐樽は一升とす）即ち一籠の容量九升づゝを容れ、之に「上」の字を書し、毎夜更闌けて僕に命じ、竊に之を貧家の門に吊して之を救恤し、以て自ら樂みとせり、三年を経て籠の製造者より洩て、飢饉年の生命の親は翁なることを知り、門に詣りて謝辭を陳ふるもの絡繹たりしと、

身延山に於ける全國社僧の集會に、翁は自ら進みて其第一の高席を占むるを常とし、滿場の會衆を睥睨して、辯論流るゝが如し、當時此の集會を寺社總席と稱せり、翁は意見を提出して、其の非なるを説き、遂に之を社寺總席と改稱せしめたりと、

松本彌太郎

鳥居本村の人なり、幼名卯之助、翠濤は其號なり、天保十年八月七日に生る、資性溫雅にして商利を喜ばず、少時より學業に志し、彦根藩の碩儒田中芹坡翁に師事し、漢籍を修め、經史に通じ、書を能くし、詞藻に巧なり、長じて帷を本村に下し、後進の教導を以て自任し、居常育英を樂と爲す、故に徳を成し材を達せしもの多し、今の錚々たる村内有爲の人は、概ね其門流にあらざるはなし、彦根の人、大東義徹、西村捨三等は同窓の友なり、彌太郎の如きは學殖豐富、言行篤實、洵に郷先生の徳を具へしと謂ふべきなり、嘗て先師芹坡翁の忌辰に當り作爲せし詩あり、

招魂人叩古禪扉、一炷清香淚濕衣、落花空山今夜月、鵲聲何故若催歸、

明治二十一年一月二十六日、六十餘年の天壽を全ふし、溘然九泉に逝けり、

松本五郎平

彌高村の人にして、性朴直、忍耐にして且つ實業の念厚く、夙に本村大字彌高の地、硯角

にして僅かに大根大小豆等を栽培するの外、山稼をなすに過ぎざれば、村民が如何に粒々辛苦に一生を齟齬するも、尙ほ生計の立つ能はざるを慨し、此地に適切なる農作物を發見し、以て此の困厄を救はんと志し、己れの所有地に桃桑林檎等を試作したるも、土質に適せざりし故か、栽培の法を得ざりしか、屢々失敗を招き、爲に其の資産を傾け、常に村民に嘲笑せらるゝも、敢て意に介せず、益々千辛萬苦を經、漸く安政年間に及び、甘薯の種苗を尾州より索め來り、栽培を試みしに、稍々見るに足るものありしかば、大に力を得、益々栽培の法を研究し、始めて將來有望なる事を信じ、廣く村民に栽培せしめ、懇篤に栽培の法を説き、大に奨勵せしかば、之を栽培するもの年と共に増加し、終に彌高村の特産物となり、彌高いもの名遠近に聞へ、販路漸く廣まり、古來の寒村をして富有の部落と化せしむるに至れり、今や膽吹山麓の諸村競て之を栽培し、地方物産の一となり、氏の餘澤を受くるもの少からず、其功其蹟の大なる實に坂田郡の甘薯先生と謂ふ可し。

岩山庄平

彌高村の人なり、文政十二年八月十三日生る、性敦厚、事を處する果斷、忍耐力強くして、經濟の術に長ず、壯年を越え、屢々里正に擧げらる、元來彌高の地たる、膽吹山の裾野な

れば、畑地而已にして、園村一畝の稻田無し、故に一飯の米猶且他村に供給を仰がざる可らず、庄平之を慨し、奮然として開墾の急務なるを悟り、倉之助、傳左衛門、惣三郎、久八等數人の同志を得、藩主(井伊氏)に新田開墾を懇請して、允を得、遂に巨資を投じ、平尾、東野の二溜池を鑿ち、灌溉の利を得、四町七段餘歩の美田を開きたり、其間年を閲する十年、具に辛苦を嘗め、終に明治元年功を竣り、村民茲に始めて自村の米を食むを得たり、素より同志と協力して爲せしと雖も、其主唱の功、辛苦の勞、松本五郎平と併せて同地の恩人と云ふべし、明治三十五年七月病で歿す、年七十四。

藤田彌右衛門

名は義景、小泉村の人なり、文政元年八月朔日生る、性沈毅、屢々里正を勤む、廢藩置縣の際、擧げられて縣吏となりしも、幾くも無く辭して郷に歸り、副區長となり、或は學校を新築し、教育に盡し、地券改正の難局を理し、常に公共の爲めに奔走して、地方の利益を謀る、縣褒状を與ふること前後六回に及ぶ、氏の村は膽吹、七尾兩山の溪間にあり、古より交通の不便殊に甚しく、伊吹村と小泉村との間、峯堂と稱する坂路を越えざれば通ずる事能はず、村民日々薪炭の運送一に肩によるの外なきを慨し、新道を企畫せんと、の念物々として止まざる事殆ど二十年、然れども峯堂の嶮、兩山相挾り、其間姉川の激

潭あるを以て、其事業太だ容易ならざりしに、明治十四年意を決して、二三の同志と擬議し、大久保、上板並、下板並、小泉伊吹の四箇村交渉を纏め、八月十四日をトし、新道の工を起す、爾來櫛風浴雨、辛酸に耐ゆること二年、同十六年一月八日、遂に素志を貫徹し、延長二十餘町の平道を成就し、荷車以て薪炭を運ぶの便を得るに至れり、多年歩々辛苦の坂路に勞せし地方人は、謳歌車に倚るの幸福を得常に、氏の徳を頌す、此れ素より地方人士の盡力によりて就りしと雖も、氏の果斷に依らずんばあらず、明治二十八年縣道に編入され、三十二年再び改修を加へ、益々交通の便利を得、地方の利益を増進さるゝに至れり、明治二十三年一月、七十三歳を以て病歿す、

勸次郎、嘉平

兩人共に醒井村の人にして、共に篤農者たる譽ありし人なり、醒井の地たる中仙道の宿驛なれば、旅客の往來、物貨の集散劇甚にして、驛民舉て旅宿茶亭を業とし、若くは貨物の運搬を事とし、一本の棒能く一家を支ふるに足れば、農業をなすもの漸次僅少となり、田園將に荒廢せんとす、因て毎戸必ず幾分にては耕作すべき規約を定め、又驛西に家屋六戸を建て、近郷の農民を移住せしめんと、の策を立つるに至れり、是れ實に安

政年間の事なり、勸次郎と嘉平とは深く之を慨し、爾後農事を以て唯一の業となし、驛事に關せず、日夜孜々として精勵以て怠る事なく、耕耘施肥の方法を改良し、毎朝晨起、先づ肥壺を攪拌して醗酵を資くること、元朝と云へども廢せず、田畑に石礫あれば小なりと雖も、必ず畦に上げて乾し、石に附着せる土を拂ひて後捨つるが如き、細心注意を怠らず、當時に於て他に例なき大豆肥料を施し、或は洪水の際天の川の橋流失して交通を絶ちしかば、劇流を渡りて對岸に達し、以て水防に努力して、稻田を愛護せしが如き、今に傳へて美談となす、領主郡山藩柳澤氏は代官の申告により、其出精を賞して杯を給ひ、後又扇子二握を賜ひ、其功を録して旌表せられたり、

巖佐由子

通稱よしへ、文化十一年十二月八日柏原村に生る、幼にして敏慧、好て字を書き、針を學ぶ、已に長じて和歌に志し、長野義言(主)の門に入り、大に歌學を修む、又傍ら石州流の茶人横關主馬に就きて茶道を學ぶ、父忠五郎嫡子無きを以て、養嗣子を入れて由子に配す、其人意と會はず、幾くもなく離縁して、又後夫を迎へず、塵俗なる生を送らんより、寧ろ終生孤節を守りて、已れの欲する所を樂み、清洒以て家を續がんと、父之を諒とす、是に於て、専ら歌茶の二道を勵み、終に妙境に達す、遠近交遊する所多し、師長野義言、志賀

谷の高尙館に在りしを以て、婦人たき子と共に屢々由子の宅に來り、歌を詠じ茶を評し、師弟の交情温なり(應酬の)よし子家を治むる事父の代に劣らざるのみならず、却て男子をして慙色あらしむ、是より先き宗家巖佐氏の家政衰頽したるを慨し、斷然決する處あり、所傳の地所の内五十二俵の田宅を割與して、本家の衰運を挽回せしむ、而して自ら守るに勤儉を以てす、故を以て自家の衰頽を來さずして、本家をして再び隆運に向はしめたり、幾くなく又住宅を改築す、宏大の結構、里中稀とする所なり、既にして宗家の八子八留藏を養ふて子となし、家を譲り、改めて忠五郎と稱せしむ、是れより東西に歴遊し、到る所名所勝地に遇ふ毎に、歌を詠じ記を草す、西國巡拜之記、信濃詣の記、日光山詣の記等皆卷を爲す、流麗の筆を揮て、沿道の勝景を叙し、加ふるに自詠の三十一字を以てす、其他詠出する和歌積みて堆し、裁縫生花茶歌道の門人數百人あり、明治廿七年十月六日病で卒す、年八十二、左に長野義言夫妻とよし子の交情を追懷すべき遺詠二三首を記す、

巳の秋桃の舍多記子國へ行きたまふを送りて

(多記子は長野義言の妻、伊勢國瀨野知雄の妹)

由子

かりそめの別れどかねて思へどもまた逢ふまではかこたれにけり

申の春長野多記子の追善によみて弘尙館へ遺す

(安政六年に多記子歿す、此詠は萬延元年の春の作なり)

由子

みし春をおもひ出つゝ立よればたもとにおつる花のした露

巳の秋先生御國へ行き給ふ時の別に送る

由子

(此の巳の秋は弘化二年なり、此の先生とは長野義言なり)

眞帆あげてこぎ行くうらの大ふねをどく吹きかへせ伊勢の神風

江龍清雄

八木長門介義陳の子にして、天保二年京都に生る、幼にして醒井村江龍宗之左衛門に養はれ、十二歳父の後を嗣ぐ、幻名宗三郎、是に於て宗之左衛門と改む、實名實房、字は子英、觀岳と號し、老後獨醒逸史、又は青楓主人と稱す、文久二年四月、和宮降嫁の時、柳澤侯の命により、一隊の從屬を率ひて、須川口を警衛す、同年六月功勞により、左の恩命に接し、郷士筆頭たるに至れり、

先祖格別家柄の者、其上多年の功勞不少、格別の思召を以て、郷士上席私事と雖、持鎗の義御免被仰付、

明治元年正月、徳川慶喜京都を犯すや、其急報至る、清雄直に神崎郡金堂の代官所(郡山藩)

所役)に至り、畫策する所ありて、意を本藩に通じ、衆心を安ずることを得たり、藩主屢々物を賑ひて、其功を賞す。

明治五年三月、犬上郡の庶務課に出仕し、後租税課に轉じ、更に史生に任せられ、間もなく辭任せり、其間北郡山東小學校用掛を申附られ、又醒井村郷學校の教官を命せらる、八年滋賀縣等外二等出仕租税課附屬を申附けられ、同年十五等出仕に進みて辭す、十一年五月坂田郡第七區長を申附られしが、同六月二日坂田郡書記に任せられ、更に坂田郡長心得に任せられ、十月一日坂田郡長を命せらる、實に明治新政最初の郡長なり、十四年七月坂田、東淺井兩郡役所合併により、更に其郡長に任せられたり、十七年十一月八日、官を辭す、以來家に居て専ら育英に従事せり、二十五年二月、本縣第四區の選出として衆議院議員に當選し、二十六年十二月解散によりて、議員を止む、三十拾七年十一月二十一日、病を以て家に卒す、年七十二、公共の爲めに金員を獻納し、木杯を受くる事二拾餘次、銀瓶を受くること一回、國典を長野義言に學びて、和歌を善くし、又儒學を大岡松堂及び彦根の外村省吾に學ぶ、韻鏡至要抄一卷、安佐寢の瓜櫛一卷、安喜の野二卷、楓廼舍還曆和歌集二卷、楓廼舍還曆未定稿一卷、楓の舍居寤集二卷の著あり家に藏す、

石川光助

大野木村の人なり、父を大助といふ、醫を以て名あり、光助壯にして武を好み、勝身流の師小桓仁輔(大垣藩士)に就きて、大に其技を磨く、業成りて郷に歸り、演武の道場を設け、門人に教授す、遠近來り學ぶ者多し、村は宮川藩堀田侯の所領たり、幕末の際國論喧々たり、藩主領内の士を募る、光助石川專八、中川洗平次等と共に召に應じて、同藩士となり、俸口を食む、廢藩置縣の後は、本郡第一區副區長となり、次で區長となり、又學區取締を命せられたり、當時明治新政にして、古への寺子屋教育より學校教育に移る、難時たりしも各區内に出張勸誘して、教育の忽緒に附すべからざるを説き、學校新築を獎勵して、教育の進歩を圖れり、明治十二年郡制施行の際二課長となり、郡の學事を擔任せしが、明治十五年七月七日、長濱の寓居に卒す、年四十五、郷里に葬る、同十七年五月二十六日、文部省は生存中教育に關し、勤勞不尠に付、追賞として金參拾五圓を附與せらる、

川瀬兵内

南方村の人にして、天保十三年九月家に生る、年甫めて十七、家を相續し、農桑の業を勵み、傍ら學を堤篁亭に請く、壯年の頃より公共の事業に身を委ね、彦根藩の命を奉じ、勸業係或は郡惣代となり、其間同藩下難村の救治、或は姉川水除工事等に盡力す、明治維

新の後區長となり、第一回内國勸業博覽會御用掛或は勸業世話役を命せらる。明治十二年郡制施行に際し、坂田郡書記に任せらる。幾もなく辭職し、再び勸業世話役、第二回内國勸業博覽會御用掛を命せられ、十四年滋賀縣會議員、組合會議員、助役、村長等に當選し、或は勸業委員、或は蠶絲業取締所頭取となり、二十五年更に縣會議員に當選せし等、一生を公共の爲に盡せり、明治二十九年十月三十日卒す。

高田傳内

南方村の人にして、天保元年正月生る。資性温厚、夙に庄屋又は戸長等の公職に従事し、特に農事に心を注ぎ、熱誠以て良法を郷黨に説く。明治十四年農事試験場の設置せらるゝや、農事通信員に選任せられ、十五年農商務省に農談會開設せられし時、選まれて會員となり、出席して見聞を説く。篤農の名大に顯はる。又大日本農會に加はり、各地の老農と交り、種子の交換選擇に勉めたり。當時稻種に傳内、肥後、南方等の名農界に賞揚せらる。又桑樹の栽培法にも傳内式と稱して、傳内主唱の法を初めたる等、終始實業を以て地方の公益を圖りたり。明治二十一年四月二十三日卒す。

福田覺城

番場村稱揚寺の僧なり、父を覺音といふ。文化十年三月家に生る。長じて學を好み、儒佛

の典籍を博渉して、其名高し、親に仕へて至孝、其母曾て竹生嶋に遊びし時、暴風の災に遭遇せしを以て、覺城の出でんとする行路、川ありと聞かば深く戒む。覺城母戒を嚴守し、橋を渡る時は必ず跣足して渡れり、故に母の在世中は竹生嶋に航せざりき。彦根藩主其篤行を感じ、賞を與ふること前後三回に及び、母死して後始めて本山の命を拜し、明治六年副議事となり、權中講義を経て中講義となり、同九年加賀、能登二國の巡化を命せられ、金澤に至りしに、偶々富山縣民暴舉、官に抗せんとす、覺城法主の代理となり、直ちに富山に至り、君臣の大義を農民に諭し、終に之を鎮撫せり。十年權大講義となり、十六年大講義に進み、二十年一等勸令使となり、二十一年權少贊教に進み、學徳並ひ高かりき。明治二十四年九月十四日歿す、年七十九。

蜂屋良潤

八幡中山徳滿寺の僧なり、學識高く、出で、大谷派本願寺に仕へ、學職に在る事三十有七年、明治十四年聘に應じて、大和法隆寺に於て勝鬘經を講すること一百日、名聲隆然として興る。擬講師、嗣講師に累進し、權大僧都に補せられ、明治三十七年十二月二日卒す。年八十一。明治三十三年十二月、南條文學博士の撰する壽碑の文、氏の傳を記する詳なるを以て、左に抄出す。

師名良潤、字道華、號九舉、又鶴栖、以蜂屋爲氏、父諱吟良、母良貞尼、文政七年十一月二十九日生、于近江坂田郡神照村八幡中山焉、八歲喪父、兄良澄無子、以師爲嗣、十歲得度、十八以後、在高倉學寮、學宗餘乘、學階至寮司、安政三年入一蓮院、秀存嗣講之門、五年任權律師、六年爲德滿寺住職、明治十年一月、讓職務于長子良有、十四年三月、應聘、趣大和法隆寺、結夏一百日、講勝鬘經、九月歸京都、在大學寮、重講此經、十七年講三論玄義、是歲補少講義、二十四年二月、爲三等學師、明年五月、補中助教、二十六年十二月二十三日、爲擬講、三十年夏、復講勝鬘經于大學寮、明年九月十二日、進爲副講、十一月、補大助教、尋補僧都、實明治三十二年九月五日也、同三十三年奉大法主命、將以三十四年夏、講觀無量壽經于大學寮、其間、講經論于諸處、又屢爲使僧、從巡教之事、文久二年、爲本山總會所、示談取締、到明治三十一年、辭之、前後在職三十七年、可謂勤矣、本年七十七、而矍鑠不異往日也、門人相議、爲師建壽碑、請余銘、銘曰、

爛熳天真、道徳潤身、廣胖護法、不知酸辛、安心不動、
 皎照迷津、講經南都、使七大新、玩索法味、喜壽迎春、
 師弟水乳、眞宗永振、

明治三十三年十二月

文學博士權大僧都南條文雄撰

宇治原十衛

鳥居本村の人なり、父を重右衛門と云ひ、母を陌間氏と云ふ、天保十三年十二月二十日家に生る、年甫めて十二、父憂あり、遂に家事を嗣ぐ、爰を以て深く文を修むるに違あらざりしと雖も、天資公に勉め、敢て私を營ふず、藩主井伊公舉げて村吏に任ず、年甫めて十九、實に萬延元年二月なり、爾後就職轉任時に隨ひ異なるありと雖も、公務を以て己れが任となすもの一日の如し、其大要を擧ぐれば、本縣第十學區取締役として幾多の學校を建築し、區民をして大に向學心を起さしめたるを以て初めとし、借地農業規約を設け、耕作を奨励し、或は稻病萎縮の害を驅除する方法を設け、或は山林規約を定め、樹木を保護し、或は縮緬織業を主唱して、民福を圖り、或は藩主井伊直弼の遭難、若しくは日清戰役等に際し、國事に盡したる、或は氏神の祭禮を改正し、若衆連の團體を改造し、以て舊來の弊風を打破したる、若しくは數箇所の道路を改修したる、功績枚舉に遑あらず、殊に困窮したる男鬼村の救濟法を講じ、人民をして悦服せしめたる、無報酬にして村長の職に盡くし、數年を出でずして村債を償還したる等、亦一般の敬仰措ざる所なり、其他慈善事業に盡したる、子女教育に心を注ぎたる、又己れの七子をして悉く中學教育を修了せしめ、更に進みて高等教育を受けしめたる者二人に及びしが如き、實

に一村の模範とする所なり、明治三十五年四月八日、朝廷氏の功績を賞し、藍綬褒賞を賜ひ、其善行を表彰せられたるもの、蓋し偶然にあらざるなり、今其全文を録すれば左の如し、

資性温厚、夙に村政に従ひ、聲望あり、町村制實施以來再三、選ばれて村長となり、克く地方制度の旨を體して、自由の發達を圖り、殊に心を理財に用ひ、名譽職の報酬を廢し、冗費を省き、節約を努めて、村債を償還し、勤儉を勤めて、一部落の衰因を救濟し、機織を起して、細民の子女に生業を授け、萎縮稻の病源を討究し、小作獎勵法を設けて、農を振作せしめ、其他力を殖林、修路、興學、防疫及び遷風移俗に竭くし、鞅掌多年、諸務整飾し、部民悅服す、洵に公共の事務に勤勉し、勞効顯著なりとす、依て明治十四年十二月七日、勅定の藍綬褒賞を賜ひ、其善行を表彰す、

斯して氏の徳望は益々高く、其職にあると否とを問はず、地方の重鎮として一般の信頼する所となりしが、明治三十九年十一月、不幸病のために逝く、享年六十五歳なりき、

辻宗範

通稱又右衛門、世々國友村の郷士なり、遠州流の茶道並に諸禮式を小堀家に修め、其奥儀に達し、兼て和歌、俳諧、俳書等に堪能にして、近衛流の書を能くす、洪道齋又添景舎と

號す、小堀家退轉の後は、茶道諸禮式の宗匠として、遠近教を請ふ者多し、性淡泊にして、名利を好まず、曾て尾州侯厚祿を以て招きしも、應せず、超然俗を脱して、門人を教授す、天保十一年八月卒す、年八十三、

成田思齋

相撲村の人なり、文化年間に至る、諱は重吉、通稱は重兵衛、思齋と號す、古へより養蠶製絲の盛なる土地なるを以て、思齋亦蠶業に熟達す、文思あり、後年養蠶絹篩を著し、製種養蠶機の方法より、蠶病の豫防桑樹の栽培に至るまで、周密に列擧し、且つ内地各地の蠶業狀況により、支那の蠶況をも纂めて、参照とせり、而して記する所、机上の空論にあらざり、多年實業に精通せし、頭腦を以て、實況を吐露する事著しければ、世人を勸誘啓發せし、利益洵に大なり、科學の進歩せし、聖世の専門家の眼を以て之を見れば、或は學理に符合せざるなきにあらざるも、文化の古に於て此著ある、翁の識見敬服すべきなり、翁晚年家を出で、終る所を知らず、明治二十一年及び二十三年、繭生絲等の聯合共進會開設せらるゝや、時の農商務大臣並に滋賀縣知事は、翁の功蹟を追賞すること、二回に及べり、茲に里人等其功蹟の湮滅せんことを憂へ、相謀りて碑を建て、翁の來歴を刻し、以て其徳を旌表す、農商務大臣井上馨、篆額を書し、滋賀縣知事井中井弘、文を撰す、

時に明治二十二年七月なり、碑文墳墓志に記す、翁の裔成田市太郎又能く蠶業に熱心し、家を繼ぐ、

太田正道

今村の人なり、諱は圓海、翠巖と號す、岩隆寺の僧なり、性淡泊内外の典籍を博覽し、遠近業を問ふ者多し、詩は最も好む所にして、名手たり、文政中毎に京都に遊び、僧雲華と唱和す、雲華素と頼子成と善し、因て又子成及梁川星巖、貫名海屋等の諸名士と交り、唱酬來往、虛月なし、星巖曾て紅蘭夫人と共に今村に來遊せし時、翠巖は二客を導きて長濱城趾に遊びし事、詩中に見ゆ、其詩清澹高雅、猶其人の如し、辻村敬甫、大岡筮州、堤篁亭等吟壇の盟友たり、安政六年齡七十に及び、將に壽筵を設けんとし、豫め之を四方に告ぐ、當時の詩に曰く、擲却浮生百事非、慈雲山上鎖幽扉、誰知天爵勝人爵、自覺真機異俗機、吟嘯只隨心所欲、棲遲且與世相違、豫期諸彦投珠玉、僕指明年是古稀、是に於て星巖以下海内の名士争ふて歌詩書畫を贈て、其壽を賀する者夥し、翠巖之を大小屏風數雙に帖し、未だ宴を開くに至らず、會々病で歿す、時に一月二十四日なり、星巖、天江等の賀詩左の如し、

翠巖上人七十壽言

星巖梁孟緯

吟詠逍遙了業緣、湖山湖水舊風煙、何妨行脚尋詩去、比趙洲翁少十年、

祝翠巖師七十壽言

天江江馬聖欽

七十猶能筋骨新、吟行月夕又花晨、若修僧史論詩筆、推我湖中翠上人、

中谷求馬

諱は俊興、白雲洞と號す、今村の人なり、安永中江戸に遊び、狩野典信の門に入り、畫を學び、業成て國に歸る、最も人物に長ず、名聲四方に喧し、曾て坂本來迎寺所藏の十界圖(現國寶)色彩剝落して圖樣殆ど辨す可からず、寺僧之を憂ひ、良匠を雇ふて之を修補せんと欲し、白雲洞の能を聞き之を聘す、即ち行て其需に應じ、補筆添彩、精巧を極め、痕を留めず、世稱して名工となす、天保三年歿す、年八十五、

中谷佐吉

今村の人なり、家世、農具鍛冶を業とす、佐吉に至て改めて銃工となり、伊賀守と稱す、天保中良銃を製し、彦根藩に獻す、藩主之を褒し、俸米を給す、時に歐米人來て互市を乞ひ、海内騷然、諸藩命を奉じて海防を修す、下野國佐野の地は井伊氏の領なり、其民多く鍋釜を鑄るを以て業と爲す、藩主命じて銃礮を鑄せしめ、佐吉を擢して其事を董せしむ、佐吉素より膽略あり、命に赴き工を督し、巨煩を鑄る、規畫宜きを得て、藩主之を嘉賞す、

安政中藩主幕政を専決し、私に外人を許して和親互市を約し、鑄る所の炮一も之を外防に用ひず、佐吉時事に感じ、職を罷て國に歸り、復業を執らず、優遊餘命を樂み、明治十一年歿す、年六十五、

小川元貞

永久寺村の人なり、其友と號す、壯年京師に出で、皆川淇園の門に入り、修學せしが、轉じて福井榕亭の門に入り、醫術を學び、郷に歸るの日、遠近治を請ふ者多し、安政二年歿す、年六十九、其子禮三家學を襲ぎ、嘗て詩を梁川星巖に質し、名手の聞えありしが、明治十九年三月歿せり、年六十七、門人等先生父子の徳を慕ひ、碑を建て、其恩を謝す、故江龍清雄氏文を撰す、

上田勇助

上丹生村の人なり、寛政二年に生る、父を長次郎、母をひろといふ、長次郎は社寺堂塔建築の工匠なり、二子あり、嫡を長藏といひ、家を繼がしむ、二男は即ち勇助なり、父勇助をして堂塔用の彫刻工ならしめんとし、文化十年勇助をして京師の彫刻家に業を習はしむ、勇助同村の友七右衛門、喜右衛門の二人を誘ひ、共に京師に出で、師事す、在京十二年、七右衛門先づ歸郷して業を始めしも、下繪の技能に乏しきを以て、二人を促し歸

らしむ、勇助、喜右衛門は郷に歸り、相提携して彫刻に従事す、實に文政六年にして、同村氏神の彫刻と成光寺の欄間とは、三人が技能を郷里に揮ひし最初の遺物なりといふ、上丹生の地靈仙山の溪谷にして、耕地多からず、爲に三人の門につきて業を學ぶ者漸く多く、終に同村の特産物となり、爾來年を追ふて發達し、神佛殿堂用の彫刻、佛壇彫刻の外、室内裝飾品等は外國に輸出せらるゝ盛況となり、現在彫刻に従事するもの十一戸、二十餘人、年々の収入五千圓に垂んとすといふ、勇助安政五年八月を以て歿す、

岡部惣右衛門

幼名は多仲、尾張の人、井上之郎の二男なり、天保六年二月大野木村岡部忠義の養子となり、名を惣右衛門と改む、惣右衛門は元來武家に長せしを以て、大神流の兵法、吉川流の槍術、直心流の鎌術、星山流の砲術等を學び、各其師より許狀を得たり、然れども數學を好み、關流の算術を竹内喜三郎に學び、天元術、天分諸約、演段、經規、筆算（古の筆算は今の洋算と異なる）等の蘊奥を極め、終に有名の算學者となり、遠近業を問ふ者百を以て數ふ、慶應三年三月十三日卒す、年六十八、

阿原助太夫

志賀谷村の人なり、志賀谷村は慶長七年以來、和歌山藩士水野丹後守の所領なりしが、

助太夫の家は代々其の代官として令名あり、土俗志賀谷の代官と稱す。

小谷武介

清瀧村の人なり、寛文十二年元京極氏縁故の地なるを以て、其孫裔なる丸龜藩主京極氏の所領となりしが、爾來小谷氏其代官として、領地並に氏寺清瀧寺の事を管す、清瀧の代官と稱する是なり。

僧覺堂

長澤村福田寺の僧なり、巧徳院點巖と號す、才識明敏典籍に通じ、權律師となれり、又蹴鞠を好み、飛鳥井家の門に入り、技大に進む、正徳二年飛鳥井家の免狀左の如し、

蹴鞠爲門弟、淺黃葛袴鳴沓錦革之事免之候、可有着用者也、仍狀如件、

正徳二年十月十一日

飛鳥井龜丸

福田寺覺堂御房

覺堂の時本堂を再建す、現在の大堂是なり、寶曆六年十二月卒す、

僧攝專

長澤福田寺の僧なり、三乘院本覺と號す、稟性明達聰敏にして、學を好み、博く和漢の典籍を涉獵し、智徳兼備はる、嘉永五年三月、彦根藩領内院家中の需に應じて、二卷鈔の判

教門を講讀す(彦根明性寺にて)又本願寺の命により、眞宗法要典據の序文を撰す、頗る詩文和歌に巧みなり、平安人物誌には和歌の名手と記す、文久元年正月卒す、年四十二、室は左大臣二條齊敬卿の妹にして、綱子と稱す、

河路光福

長濱町の人なり、幼名龜吉、平四郎と稱す、天明元年十月生る、長じて學を好み、文化十一年賀茂季鷹の門に入り、和學の淵奥を極め、和歌に長ず、名聲漸く高く、業を問ふ者多し、長濱御坊連枝能滿院、智明院等光福を引て和歌の師とせり、天保三年家を嫡子光應に譲り、専ら門人に教授す、季鷹爲に守靜庵の號を贈る、嘉永元年病で歿す、年六十八、光福家集、五十瀬迺濱豆騰、吾孀路日記、大和記行、城崎湯島道迺記等の遺著存す、同町の人若森護且、河路清遠、宮尾季奥等門中の高足たりし事、彦根歌人傳に見ゆ、光福の弟良暢あり、壯年京に出で賈人となり、巨萬の富を蓄ふ、曾て林某と協力し、資を投じて長濱八幡宮の碑を建つ(神志社志参照)

河路光應

長濱町の人にして、河路光福の嫡子なり、幼名延藏、平四郎と稱す、字は光應、春樵又鷗處、篤齋等の號あり、學を父に學び、和歌を好くす、又大岡松堂につきて經史を究む、後年畫

を好み、初め大塚岐風の門に學びしが、後京師に出で横山晴暉に従ひ、六法を悟り、入室の稱あり、明治四年五月歿す、年五十六、彦根歌人傳に詠歌を添ふ、

初雪

さゝなみの志賀の浦風さへさへて比良山遠くふれる初雪

平田清時

牛打村の人なり、字は黒山、通稱は孫左衛門、學を百如律師に學び、和歌を能くす、寛政十一年三月卒す、年僅かに二十一、美濃の垣齋の著述せし春悟日記に、師が清時の早世を惜みし事を記す、比叡山不動院に清時の歌集を傳へたりとて、七代目市川團十郎を詠せし狂歌に、

じく抜の柿のすはりの七代目澁のぬけたる江戸の親玉

磯崎種榮

磯村の人なり、字は保安、石義庵と號す、初め安次郎、後文右衛門と稱す、性和歌を好み、彦根の歌人土樹の門に入り、毎年京に遊び、諸名家と交れり、法縁寺惠博、宮田重慶と親友たり、天保七年十月二十一日卒す、年二十四、其歌に

雜煮よりまづ水さしにいも頭いざ大ぶくの朝茶いはらん

忍ぶ身のこしにあるとも白川のせき拂さへならぬつらさよ、

岩脇正秀

岩脇村の人なり、幼名宗千代丸、後に九兵衛と稱す、彦根藩士長野氏の臣となり、元和元年大坂の役に従軍す、後松永貞徳の門に入り、和學を修む、北村季吟、深草元政と友たり、晩年烏丸光廣卿の知る所となり、常に相唱和す、正秀の詠歌頗る細川三齋の風調に似たりとて、光廣卿一二齋の號を贈らる、又竹中流の軍法を極め、業を受くるの門人多し、天和二年九月二十四日卒す、年七十三、

西山篤雅

梅ヶ原村の人なり、字は子正、文策と稱す、壯年京師に出で、醫を福井終吉に學び、在ること十餘年、後醫博士錦小路頼易卿に仕へ、醫名大に高し、老成に及びて郷里に歸り、業を聞く、名聲藉甚、遠近治を乞ふ者、門前市を爲す、詩歌を能くす、

僧惠見

寺倉村正業寺の僧なり、青年京に出で、徳妙寺蘭風の門に學ぶ、又和歌を香川景樹、小原君雄に學び、出藍の譽あり、其名彦根歌人傳に見ゆ、

寒草帶霜

人めさるかれ行野邊の冬草にくちはてよどや霜のおくらむ

鳩

月をまつ外山の裾の夕ぐれはいかでか鳩の雨をよぶらむ

若森護且

長濱町の人なり、通稱六郎右衛門、和歌を嗜み、初め河路光福に學び、後彦根の小原君雄に師事す、天稟の歌才にして名聲當時に高し、彦根歌人傳に其詠を添ふ、

首夏更衣

きのふまで春はくれしな卯の花のひとゑにかふる夏衣かな

月

久かたの月のかゝみの影みれば心にくまもなき夜なりけり

宇野幸雄

長濱町の人、家號を灰屋、吉兵衛といふ、父を五郎左衛門といふ、幸雄は其嫡子なり、和歌を河路光福に學び、名手の聞あり、彦根歌人傳に其詠を添ふ、

山霞

みどりなる霞の衣立そめて袖なる山に春や來ぬらむ

庭前菊

萬代をふる庭もせに雪とのみまがふまがきの白きくの花

河路清遠

長濱町の人にして、通稱重兵衛、和歌を嗜み、初め同族光福に就きて學び、後敦賀の石津資元、京師の香川景樹に學び、其技上達せり、彦根歌人傳に詠歌を添ふ、

朝の雲夕べのきりも分らぬにいく日來てけむ木曾の山道

西村敏政

長濱町の人なり、通稱五郎左衛門、家號を酒屋と稱す、博學多才、和歌を河路光福に學び、出藍の稱あり、彦根の歌人小原君雄、常に敏政の秀歌を賞歎せりといふ、彦根歌人傳に見ゆる詠歌左の如し、

春色浮水

汀なる柳若菜にさきだちてみどりをいそぐ庭のいけ水

岩瀬理平

四ッ塚村の人、父を金右衛門といふ、理平名は貞諒、字は子直、嘉永年間京師に出で、中島棕陰の門に遊び、能書家として當時に其名高し、平安人物誌に傳を記す、

堤獨庵

新莊村の人にして、家世、醫を業とす、壯年京師に出で、頼山陽、猪飼敬所等と交り、詩文を唱和し、其名著る、後に毒庵と改む、平安人物誌に傳を記す、

市川君圭

醒井村の人なり、名は適、字は君圭、又は君啓と書す、眠龍は其號なり、文政年間の人なり、君圭壯にして京師に出で、書を學び、専ら元明の古法を模寫し、能く其法を得たり、巧に山水人物を畫き、殊に鶏の妙手と稱せらる、筆痕雄健にして、雅致に富む、其子君章、又父業を繼ぐ、君圭の門人に張月樵あり、出藍の稱あり、君圭の死地分明ならず、相傳ふ邸宅は十王水の西方にありきと、

大村佐助

醒井の郷士にして、古き勢家なりしが、元和堰武以後世太平となりしより、宿の間屋を始めたりに、嚴然たる風姿なりしにや、今に俚語を存す、

問屋ならこそ荷はつけ卸せ、佐介御方の顔さがよ

と、然るに元祿の頃、家計零落して他郷に移居せり、

石丸三近

仙角と號す、大野木村の人なり、性園碁を好み、江戸に出で、其技を磨き、終に名手となり、元祿十三年十一月、本因坊は七段に對して先手たるべき許狀を與へたり、其文書左の如し、

貴老園碁累年被致修業、熱心不淺、所作依相口、今度對上手、先之手合許之候、彌以無怠、慢可相勵者也、仍免狀如件、

元祿十三年十一月十五日

本因坊

石丸三近老

三近の碁名方圓界に喧し、寶永年中輪王寺宮の召により、日光山に上り、黑白を以て寺中に客たり、歸るに臨み賞及び御筆の名號を賜ふ、

吉田市次郎

長濱町の人にして、嘉永年間船町に住す、將棋の名手にして、其名高し、江戸に出で諸大家と交り、九段の階に進み、終に大橋宗桂の後を繼ぎて、本因坊となり、幕府に出入せりと(平安人物誌)

五大坊蓬山

大原村觀音寺淨光院第十一代の僧にして、膽吹正翁の師父なり、榎木村松波氏より出

づ、翁藝術に長じ、花道、和歌、俳諧、書畫、點茶、蹴鞠、煙火等の技藝に通せり、殊に插花の技に至りては其の蘊奥を極め、遂に嘉永の末年松月堂古流の家元なる植松家より、五大坊職を拜命せり、安政三年十月、柏原驛に於て之れが賀筵を張りしに、家元雅言卿を始め、諸國の斯道に堪能なる者、并に門弟等來會するもの其數數百人に達し、其儀太だ盛なりき、雅言卿は左の和歌を寄せて祝意を表せられたり、

長月のながき千とせのあきをえてさすしらくはいく世にははむ

門弟の其技を修むるもの日々數十人に及びたりと、殊に翁は毎年四月、京都丸山也阿彌の花會には必ず臨席せりと云ふ、萬延元年十月五日、享年七十二を以て歿せり、今觀音寺に一基の碑あり、翁の爲めに門人の建設せる所なり、

五大坊鷺嶺

柏原村勝專寺の僧にして、輩止保教と稱す、文政三年正月生る、教導の餘暇松月堂古流の插花を好み、技を問ふ者甚だ多し、明治十一年十月家元植松雅德卿より日本總會頭に任せられ、五大坊の號を授けられたり、氏の傳は野村藤陰翁の撰せられし碑文に詳なれば左に抄す、氏、明治三拾九年七月七日を以て卒す、年八十五、

鷺嶺宗匠名保教、號五淨院、近江國柏原勝專寺廿一世住職、眞宗僧也、幼志宗學、年長滋

勉、教導匪懈、遂拜訓導、傍又嗜插花、入植松雅德氏門、修松月堂花道、自號曰鷺嶺、法餘從事於此道有年焉、夫插花之技博矣、立門分派、互競巧鬪、奇而本派之爲道不枉、百花百木之性、移天然之姿於瓶中、以陰陽五行表人倫五常之道、實不違聖賢之旨、豈與尋常遊技同日之論哉、抑本派者淵源於南都護命僧正、爾來聯綿、與儀相傳、千有餘年、故世稱古流、至元治慶應之際、時勢變遷、風雅之道廢弛、花道亦隨衰退、宗匠深患之、將有所興復焉、明治十一年十月、任日本總會頭、授五大坊號、於是宗匠益奮勵、欲唱此道於四方、飄然遊杖諸國、所到慕其德、靡其風、大致花道之隆盛、實可謂本派之中興矣、亦可以見盛德花香之一致也、今茲宗匠以年老將辭職而退隱、於是社中相謀、欲傳宗匠之盛功於不汚、兼報師恩之萬一、乞其平常所用剪刀、瘞之於寺內西北隅、建碑以表紀念、來乞余文、乃次其事爲誌之、明治廿一年戊子春三月也、

濃陽大垣藤陰野村煥撰

平兵衛

七條村の人なり、寛保三年に生る、家世、農を業とす、平兵衛質素儉約を旨とし、常に粗衣粗食を以て家業に精勵す、故を以て家計漸く豊なり、天明三年凶作により、飢餓の聲天下に高し、平兵衛謂へらく、多年貯蓄せし米錢は此の如き時に散すべきなりと、同四年

七月里正を介して、玄米貳百俵を藩に獻じ、窮民を救恤されんことを請ふ、北筋奉行平兵衛の平常に異なるを怪み、人をして細探せしめしに、素より平兵衛の赤心なりし事分明せしを以て、之を聽納し、同年十一月三日、其篤志を賞し、永代米二口を興へられたり、子孫連綿其惠澤に浴し、明治維新の時に及べり、平兵衛は常に質素を守るも、密に貧者に金品を贈り、或は寺田を寄附する等、慈善を以て至樂とせり、能登瀬村百如庵主慈芳律師は平兵衛と親交ありしといふ、平兵衛天保元年六月十日歿す、年八十八、是より以下彦根藩士佐藤貞寄の編する教生録中に見えたる本郡人に關する履歴の要項を抜記す、

四ッ塚村彌兵衛

父を助五郎といふ、彌兵衛は其長男なり、助五郎彌兵衛の母を離縁し、高番村より後妻を迎へしに、女子三人を生みて病死せり、助五郎更に濃州より後妻を入れ、男女三人を擧ぐ、而して夫妻共に身體健康ならず、所有の地所僅かに三石餘なれば、一家九人三腹の子女あり、糊口頗る困難なり、彌兵衛此間に長じ、能く弟姉を慰り、數段の田を小作し、辛苦艱難に堪え、能く一家を支へたり、隣閭感歎せざるはなし、寛政二年十二月、井伊侯米若干を興へて其孝を賞す、彌兵衛時に年三十一、

中嶋村おごま

中嶋は朝妻筑摩の中に一區域をなしたる小村なり、今其名なし、おごま兄あり、義八といふ、夙に母に死別せしかば、兄妹二人、父淨光に至孝を盡せしが、おごま三十四歳のとき、兄又病死す、家貧にして父は壯年の頃より、湖涯に小舟を浮べ、美濃國より大津に送る鱈、鮫、鴨等魚鳥の荷物を磯の濱まで回送するを業務とせり、然るに父は老衰し、兄は死し、糊口の道絶へんとすれども、おごまは女子の身を以て能く其業を繼ぎ、風晨雨夕、曾て廢せず、送荷なきの日は雇はれて賃を得、老父をして心安からしむ、郷人其孝を感じ、良夫を迎ふべきを勸むるも、おごま應せず、良夫若し良ならざれば、父の孝養を欠くべし、若かず、獨身以て老父を養はんにはと、事藩公の聞く所となり、寛政二年十二月、深く其孝を賞し、米若干を興ふ、淨光時に年九十、おごまは四十一歳なり、

庄屋源藏

永久寺村の庄屋なり、寶曆、明和の間、其村非常に衰へ、石高六百八十石餘の村にて、四十餘町の田地を他村に質となし、銀二十貫目を共同借用したりしが、年々其利息を仕拂ふ爲め、閭村益々困窮となれり、偶々天明六年、歳大に凶し、一升の米價二百文の高直となり、飢者道を滿つ、井伊侯大に救米を其領内に分與し、永久寺村へ二百俵の恩惠を受

けたり、庄屋源藏膽略あり、一日横目組頭等を招き、謂て曰く、多年村債に艱むも、未だ償還の途なきを憂ふ、今凶年なりと雖も、藩公の恩賜あり、之を以て村債を償還し以て後患を斷つに如かずと、衆曰く、年凶し村内の赤貧糊口に窮すべきも、是は郷黨相助けて其憂なからんを期すべしとて、終に其議に従ふ、源藏依て債主に請ひ、二百俵の米を以て二拾貫の村債を償却するは未だ足らざるあるも、幸に之を許されたしと、債主之を諾す、かくて返還されし田地を天明七年より共同耕作し、未だ村債の償還せられざるものと假定し、其收穫米を年々積蓄し、農閑の時機には一村の老若協力し、蓆織繩ない草鞋作り等の副業を勵み、各之を組頭の宅に纏めて蓄積し、又永久寺川原と稱する荒蕪の地を開き、池沼を埋めて美田をなす等、頻りに一村の經營に熱中せしかば、四年にして百俵餘の米を蓄へたり、源藏之を奉行所に届け、之を他に貸附せん事を請へり、奉行之を諾し、代官所に命じて之を他に貸與し、其利殖を村の收入とし、數年ならずして主客轉倒の村たらしめたり、事藩主に聞へ、寛政二年十二月、源藏以下横目組頭等十四人を奉行所に召し、深く其功勞を嘉賞し、廩米を與ふ、

舟屋武兵衛

長濱小舟町の人なり、兄を武助といひ、舟の製造を業とす、武助父の家を繼ぎしが、性放

蕩にして、數年ならずして産を失ひ、多くの負債を爲し、一家の生計困難となりしが、親屬故舊等相議して、天資篤實なる武兵衛をして、兄に代り家を繼がしめんとす、武兵衛固辭して已まらず、美濃國大垣に住する伯父二人ありて、相當の富をなす、伯父等更に武兵衛の兄に代りて父業を繼ぐべきを勸め、汝にして家を繼がば前債を免し、更に應分の助力を與ふべしと、武兵衛終に之を諾し、夫れより早曉に起き、深夜に寝ね、専心家業に精勵し、勤儉力行、其年内に五十三兩の金を獲たれば、直ちに之を兄の債權者に配分して返濟し、數年ならずして兄の失敗を恢復して、父の家名を相續したり、

永久寺村惣内

惣内は早く父に死別しければ、老母に仕へて一意孝養を盡し、母命すれば、寒暑を問はず、其好む物を調へて之を供し、而して家業に精勵す、里人妻を迎ふるを勸むるも、妻帶すれば母に孝養を怠るが如き事あらんを恐れて、其誘ひを諾せず、五十六歳まで妻を迎へざりき、藩主其孝養を嘉賞し、寛政五年米若干を與へたり、

宇賀野村かん

宇賀野村十右衛門の妻なり、十右衛門は同村より尼妙順の妹に養子として入りしが、一子を擧げて後、其妻病死せり、かんは即ち其後妻なり、天性柔順にして、能く養母に仕

へ、殊に先妻の子を愛撫し、家貧なるも其困難なる様を老母に見せしめず、赤誠以て老幼に仕へ、家業を勵めり、妙順かんの孝養實子に優るを喜び、感涙以て常に隣人に話せり、里人其孝養に感ず、寛政五年藩主米若干を與へて之を賞せり、

榎木村政右衛門

赤貧の家に生れ、早く父を矢ひ、十二歳の時より他家に雇はれしが、天性純朴にして、主人の爲に忠勤を勵みたり、母漸く老ひ、起居自由ならざるに至りては、夜に入り主家を辭して家に歸り、母に仕へ、毎朝拂曉に母の食事を調理し置き、而して主家に至りて業を勵みし事累年一日の如し、郷黨以て其孝を感ず、寛政十一年藩主米貳石を與へて、其美行を賞す、政右衛門時に年六十六、

永久寺村善助

家は僅かの田産を有せしも、七十餘歳の老父母と四人の童女と夫妻を合して八口なり、一町餘の田作をなし、僅かに一家の糊口を凌ぎしも、猶收支を辨せず、少許の田産も終に賣却して、貧益々貧となれり、然れども兩親の欲する所は之を求めて供し、耕耘の餘暇には妻は麻を績み、或は賃機を織りて其料を得れば、老親の好物を調へて孝養せし事、藩主に聞え、文政十年米若干を賞與せらる、善助時に年四十七、

米原村ごま

兩親に仕へて至孝なりしが、母歿して父の年漸く老いければ、日夜父の意に従ふを唯一の行となしたり、寛政二年藩主其孝を賞し、米を與ふ、

顔戸村文内

謹直なる農夫なり、田産八段餘を所持し、常に耕耘に奮勵せり、父母に仕へて孝、曾て妻を迎へしも、妻の舉動父母に孝ならざるを見、直に離縁し、人の勸むるあるも再び娶らず、終生獨身にして、兩親に孝養を怠らざりしかば、文化九年藩主米若干を與へて、其孝を賞す、文内時に年四十八、

箕浦村新藏

天性謹格にして、行狀最も正し、毎年年貢米拾俵餘を藩の御用米藏に上納せしが、米の乾燥より米拵繩俵等に至る迄、丁寧親切に調製し、運送の時にも自から之を丁重に取扱ひければ、彦根藩の藏役人も新藏米と唱へて、年々特別に保存せり、而して其家豊ならず、小作田のみなりしに、此く秀でたる行ひのみなりければ、文化十二年米若干を賞與せらる、時に年五十六、

日光寺村常次

常次の父は藤内といひ、八拾餘歳の老人にして、盲目となれり、常次一弟一妹あれども、皆外に婚し、而して己れは妻を娶らず、獨身にして三段餘の小作田を爲し、力耕自から勤む、耕耘の間には家に歸り、老父の食事より兩便の世話等、曾て一度も人を勞せず、父の好む物を命ずれば、欣然として之を調へ、以て孝養を怠らざりき、文政六年藩主其孝を賞し、米を與へ、猶父生存の間は毎年米を與へられたり、

新莊村理右衛門

天性謹直にして、納租の米質人に秀でて、能く俵拵等も入念に爲し、其人曾て人と争ひし事等なく、賞すべき良民なりとて、文化九年藩主より米若干を與へられたり、

小一條村そよ

父を猪兵衛といふ、猪兵衛早く死し、母は長病の床に臥して起居自由ならず、そよ能く母に仕へ、家業を勵みしが、母の病漸く治せしかど、病後の衰弱甚だしく、歩行すれば其轉ばん事を恐れ、母が佛寺へ詣らんとすれば、直ちに附添ひ、一日も獨行せしめざりき、寛政十年藩主其孝を賞し、米を與ふ、

萬願寺村四郎兵衛

初め新治と稱せり、兩親並に祖母に仕へて至孝、家困窮なれども三人の老人には可成

好き物を供し、己れは龜衣龜食して耕耘に勵み、一家和氣霽々たりき、事藩に聞え、寛政十年米二石を賞與せらる、

下坂中村淺右衛門

篤農者として、寛政十一年藩主より賞米を授けらる、

榎木村七右衛門

篤行の農夫なりしが、十五歳の時より毎年秋收の初めに初穂米二升づゝを除置き、四十二年間蓄積して、玄米貳俵に達せしが、國恩を報せん爲に獻納致したきを申出でたれば、奇特の行ひなりとて、金貳百疋を賞賜されたり、時に享和二年十月にして、七右衛門五十七歳の時なり、

架納村市郎兵衛

父早く死亡せしが、母に仕へて至孝、よく農業を勵みしが、妻又病床に臥し、市郎兵衛一人日々力耕して、一家曾て嘆嗟の聲なし、文化元年藩主米若干を賞與せり、時に年六十三、

小澤村勘右衛門

清廉にして仁慈に富みし人なり、曾て彦根藪の下に又兵衛といひ桶屋を職とせしも

のあれども、糊口の道立ち難き由を聞き、其養母と妻子とを己れの居村に呼寄せ、住宅を建て養ひ置けり、又居村内にも困難の人ありしかば、同じく我邸内に住宅を建て、之を鞠養せり、里人其徳行を賞し、佛勘右衛門と稱す、慈心佛の如きも、勘右衛門は又嚴霜烈日の如き氣概あり、某年其村集會の時、衆人の中に於て不正の人あるを聞き、之を嚴戒せしかば、其人爾後行を改め、深く勘右衛門の恩を謝せり、里閭故障の生ずるあれば、自から進んで之を調停し、私財を費すも之を辭せず、里人皆其人を徳とす、文化四年藩主米若干を與へて、其篤行を賞す、

弟仁兵衛又能く兄の命を守り、家業に精勵し、常に曰く、兄と我とは凡主君と奴僕との位置ならざるべからずと、此兄にして此弟あり、勘右衛門後に家を仁兵衛に譲り退老せり、

萬願寺村庄右衛門

父母に孝にして、家業に精勵したるを以て、文化九年藩主米を與へて、之を賞す、

十里村十介

田地四段を有せし小農なりしが、業務に熱心なるを以て、比較的多くの産米を得、國恩を報ずる微志なりとて、初穂米を獻納せしを以て、文政二年十二月賞を與へらる、

新庄東村庄藏兄弟

新庄東村は今の大字南方の東部の前名なり、庄藏父を庄右衛門といひ、母と共に年老いたりしが、庄藏弟銀藏、妹しよの三人は、何れも父母に孝を盡し、一町餘の水田を小作し、兄弟相和して力耕し、老親を安せしめ、瑞靄茅屋に滿ち、里人其和睦を感ず、天保四年藩主米を與へて之を旌表す、

市場村吉郎平

八十四歳の母と十一歳、七歳の女子と一家四人なりしが、母は性來痴性物にて、事々物々怒りを發する癖ありしも、吉郎平は一も其命に背きたる事なく孝養しければ、母も終に吉郎平に化せられて、溫和の媪となりたり、吉郎平所有の田地二段にして、外に五段を小作し、日夜只一人にて其業務を勵めり、天保四年年稍々豊ならず、人々小作米の減額を地主に請ふも、吉郎平は一言之に雷同せざりき、地主は吉郎平が定めの小作米を納附するに感じ、少々にても減米を與ふべしといへば、吉郎平は之を請けずして曰く、今年は豊熟に非ざるも、定米を納附して猶殘米あり、未だ減米を請くるの凶作にはあらずとて、之を辭したり、又侯伯の通行頻繁なる時、中仙道に人足を徵發せらるゝ事を、其村の庄屋より通ずれば、老母と幼兒とを隣人に依頼し、未だ一度も庄屋の命に應

せざることもなかりき、郷里以て感賞す、天保四年藩主其善行を賞し、米若干を與ふ、

加田村七兵衛

父は早く死し、母に仕へて孝養怠らず、一弟あり、治右衛門といふ、幼にして高橋村見附屋の丁稚となり、忠實に主人に仕へたり、七兵衛の家は農業なれども、父の時より業暇に鎌の小賣をなせり、父死して後七兵衛又その如くす、品質良くして價廉なるを以て、遠近顧客年々七兵衛の來るを待ちて争ひ購ふ、例年の顧客某偶々鎌を買はず、七兵衛去年の品悪かりしかを問ふ、某答へらく、鎌悪しきにあらず、去年買ひしもの猶使用せずして存すればなりと、七兵衛意解けて去る、其歳七兵衛鎌代の掛取を爲せし時、偶々掛帳に家名を誤り記せしを覺えず、賣らざる家に代金を請求せしに、某は正直なる七兵衛がかく記せしは誤ならんも、請求するまゝに其金額を渡せり、後に隣家と家違ひなりし事發見し、曩に請求せし金を戻し、低頭罪を謝して歸り、爾後傳來の鎌賣を廢せんとす、里正武右衛門百方其心を慰め、漸く意解けたり、既にして七兵衛同村より妻を娶り、一男兒を挙げしが、二三年を経て一日妻を離別せん事を申出たり、曰く、家貧にして兒多ければ、母の孝養を欠かんと憂ふ、汝年未だ若し幸に一男子を得たれば、我家の相續人はあり、早く他の良縁に嫁して幸福を得べしと、妻の曰く、母に孝養を盡すは良

夫而已の事にあらず、妾此家に嫁せば母に仕ふるは良人と異なる事なし、縱令貧困に沈むも母に仕ふるの道を怠るべけんや、長く相共に慈母に仕ふべければ、妾をして安居せしめよと、七兵衛欣然として爾來夫妻共に孝養を専らにせり、弟治右衛門主家の年期満ちたれば、主人は在勤中忠實なりしを喜び、加田村に家を建て、治右衛門を分家せしめしに、幾もなくして火を失せり、兄弟驚きて延焼なからしめんと助を得て之を消したり、爾後兄弟共に如何なる會席佛會に出づるも最下の席に座して、失火當時の村人の消防の恩を忘れざりき、某年老母京都の本願寺に參詣を欲するも、歩行に艱むを告ぐ、七兵衛喜で治右衛門と共に竹輿を奉じて京に行く、治右衛門元來商賣にして擔輿に慣れず、輿中の母が辛勞ならんを恐れ、米原に至る頃、治右衛門を返らしめ、一人を雇ひて、終に母を京都に連れ、本願寺に詣で、又所々を見物せしめ、母をして十分の快を得せしめて歸れり、郷黨以て美譚とす、里正其篤行を藩主に申さんとせしに、七兵衛之を聞き、再三固辭して終に止みたり、

樋口村しん

醫師久哲の妻なり、先代久啓早く歿し、養母未だ年若く、性多淫にして素行良からず、嫉妬の心深くして、常にしんを苦しめし事少からず、久啓深く母の非行を憂ひ、時々病と

稱して衾中に臥す、然れどもしんはよく婦道を守り、母を敬ひ、夫を慰め、十年一日内助の功を積み、然るに四子ありて漸く長せし頃、久哲病死したり、しん益々老母に孝養を盡し、四子を教育せしが、長子長じて良醫となり、遠近治を乞ふ者、門前市をなすに至れり、郷黨しんの貞烈を賞揚せり、

四ッ塚村助左衛門

父早く死せしが、母に仕へて孝、母命するあれば言下直ちに服して時を移さざりき、某日屋根の葺替に着手せしに、俄に雨降り來りければ、母は助左衛門の轉落せんを氣遣ひ、早く中止すべきを命せり、助左衛門直に其命に應じ、屋根より下り、雨滴家中に湛々なりしも、傘を以て此れを凌ぎ、翌日雨の霽るを待ちて葺替を了せり、

本庄村仲次

兩親に仕へて至孝なりしより、文化十三年十二月十八日、藩主米二石を與へて之を賞す、

上矢倉村市郎兵衛

天明二年米穀豊ならず、翌年米價高くして、貧者の飢に泣く者少からず、市郎兵衛時に年僅かに十五歳なりしが、豫てより貫ひ置きし貯金を出して、飢者に與へたり、事藩に

聞へ、同年六月其篤行を賞せらる、

室村さく

父淨節死し、母は年老いたりしが、さく能く孝養を盡し、家貧なれば日々に雇はるゝに、早起母の食事を拵へ置き、而して雇主の家に行き、夜に入りて歸宅すれば、母を慰め、手を撫で、足を擦る等一意母を安慰せしめたり、天明三年七月、藩主米を與へて其篤行を賞す、

榎木村庄右衛門

父は政右衛門といひ、嘗て親孝行を以て郷里に聞え、寛政十一年褒賞を與へられし人なりしが、子なきを以て、庄右衛門を養ふて子とす、然れども家産豊ならず、庄右衛門家業を勵み、而して養父に孝養を盡しければ、文化十三年十二月十八日、藩主米二石を賞與して之を旌す、

南田附村さつ

父は藤右衛門といふ、母は病死し、藤右衛門又眼を憂ひて、終に盲目となれり、さつ孝養至らざるなし、藤右衛門盲目なれども、さつが日々獨り田圃に出づるを厭ひ、共に出で、耕耘をなす、某年挿苗の頃、さつ父子は田に出で、苗を挿み居りしに、偶々彦政藩吏通

行の際其狀を認め、後里正につきて、さつ父子の事を調査し、其篤行に感じ、之を藩主に申せしかば、文化十年十一月二十一日、若干の米を與へて、之を賞されたり、後年井伊侯領内を巡視せし時、さつ父子を長濱町に召し、褒詞を下し、更に金二百疋を與へたり、

小一條村清八夫妻

妻をらくといふ、夫婦共に溫和柔順にして、老母に孝養するを以て、唯一の業とす、母の參寺するに方りては、清八必ず之を負ひて送迎するを例とせり、長濱の大通寺には例年夏の御文と稱し、小暑の頃佛會を行ふ、之を夏中と稱す、老母この會に參詣せんといへば、里餘の道を背負は、負ふ者負はるゝ者共に暑さに堪えずとて、清八夫妻は母を「てご」(舂)に乗せて二人之を擔ひて、長濱に詣でしめたり、文化十三年十二月十八日、藩主米若干を與へて、其篤行を賞す、

樋口村大恵

正覺寺の僧なり、天保三年國恩に報ずる微志なりとて、金千疋を獻納せしが、褒賞として江州綿二包を授けられたり、時に十一月九日なり、

七條村新平、猪平

兩人共に天保七年各々金一兩づゝを獻納せしにより、三月廿一日酒肴を與へられたり、

堀部村太助

休右衛門の弟なり、同村太兵衛に養はれて嗣子となる、養父母に仕へて至孝なりしが、幾くもなく父病歿したれば、太助は一意母に仕へ、農事に精勵す、太助の田圃に出づるに當り、老母は共に野に行かんといへば、太助は喜で、母を背負ひ、涼しき木蔭に母を居らしめ、獨り耕耘に従事す、母又田に入らんといへば、盥を田中に据ゑ、其中に母を奉じて、毫も母の意に悖らず、郷黨太助の孝にして順なるに感嘆せり、天明六年藩主米を與へて、其德行を旌表す、

持野村きわ

持野は現在の東黒田村大字志賀谷の北部即ち加勢野なり、きわの父は八兵衛といひしが、八兵衛病歿の後、きわは老母の命に服し、一舉一動只母の命に従ふ、家元より豊ならず、晝は農事に勵み、夜は紡績の事を勉め、具に辛苦を嘗めたり、然れども母の欲する所は道の遠きを辭せず、價の高きに拘らず、之を求めて其需めを滿せり、孝行娘の名高く、事藩主に聞え、寶曆十三年十二月、米拾俵を褒賞として與へられたり、

加田今村善右衛門

文政五年國恩に報せんとて、金五兩を献上しければ、其篤行を賞し、江州綿二包を與へ

らる、時に五月七日なり、

八幡中山後藤治

天明三年凶作にして、米高く、貧民の困窮甚だしき時、後藤治は村内の貧民に米穀を與へて、其難を救ひたれば、藩主其篤行を賞す、時に同年五月某日なり、

新庄村數右衛門

妻早く死したりしが、爾來獨身にして家業を勵み、年老ふるも嘗て之を廢せず、七十七歳の時始めて養子を貰ひたり、藩主精勵を嘉賞して米を與ふ、時に天保八年六月にして、數右衛門八十歳の時なりき、

番場村清助

息を清次といふ、りとは清次の妻なり、天保七年十月清助はりとは共に田に出で、稻を扱ぎしが、其日りとの弟にして喜和松とて、十五歳の少年、姉の業を助けんとて、同じく田に來りて稻束を運び居たりしに、一匹の猪出來りて、喜和松に咬み附きたり、喜和松驚きて救ひを求む、事不意に起り、猪を打つ具なし、清助七十歳の老翁なれども、田荷用の鋸鎌を以て走り、喜和松を救はんとせしも、猪容易は喜和松を放たず、りとは老父の身に害あらんを憂ひ、己れの使用せし、稻扱を携へて行き、猪の頭を撃ちしに、猪驚

きて終に走り去りたれば、老父幼弟共に無事なるを得たり、事藩に聞え、清助は老體にして幼者の難を助けたりとは女にして猛獸を恐れず、老父幼弟の難を救ひし奇特を賞し、同年十二月十四日白銀二枚づゝを與へられたり、りとは時に年二十二、

番場村角右衛門

天資温良にして、克く孝を母に盡せしが、母病床に臥し、終に不治の難病となり、身體自由を失ふ、角右衛門妻を迎へ、一子ありしも、産後母子共に死亡し、一家只角右衛門と母のみとなれり、母は身體疼痛して已まず、日に三度づゝ入湯するを唯一の快とす、角右衛門日々その看護に従事し、家計益々貧困となるも、母を慰安して止まず、郷黨傳へて其至孝に感ず、

間田村さの

父を萬藏といふ、さの人を介せられて、本庄村に嫁げり、父卒して後、母は眼病を患ひたるに、看護の者なければ、隣人は母をさのの宅に引取りて看護せんことを勧めしも、さのは縁家も家計豊かならざるのみならず、母を夫の家に移さば、母の心も安からざるべしとて、終に睦みし夫と離別して家に歸り、孝養怠らざりき、

室村藤右衛門

篤農者なりしが、妻に別れし後は、獨身以て耕耘に従事し、齡八十に及ぶも變る事なし、天保五年藩公米を與へて、其篤行を賞せらる。

鳥羽上村彌右衛門

庄右衛門の長男にして、初め久藏と稱せしが、伯父彌右衛門の養子となり、名を彌右衛門と改む、性溫良、恭儉にして、養父母に仕へて孝、貧者に仁なり、寛政十年國恩に報せんとて、金二百兩を獻納せり、藩主其篤行を賞して、同年十二月十九日、玄米五俵を與へたり、教生録記する所は、獻金のみ、賞と見ゆるも、當時彦根藩の老中より北筋奉行に達せし文書には、至而孝心篤實者之趣、御殿様達御聽爲御褒美、右米被下置候間、恭く頂戴爲致可被申候、以上とあり、而して寛政十一年の獻金は、金二百兩に非ずして、二百五十兩なりと傳ふ、果して然らば以上列記せし教生録中の善行者の記事も、事實と多少の誤りなきを保し難きも、今は同記事に因りて之を記したり。

長濱町の三十三人

天明三四兩年穀豐ならず、米價高値にして、飢者途に滿つ、當時長濱町の有志相謀り、各々米穀を義捐し、之を施與し、或は安賣をなして貧者を恤みたりしかば、同四年四月藩主井伊氏は左の三十三人に褒詞を與へ、其善行を賞せり。

一下舟町	三左衛門	一吳服町	藤右衛門
一吳服町	九郎右衛門	一拾一町	仁左衛門
一北出町	吉兵衛	一西御堂前	六左衛門
一下吳服町	庄五郎	一同町	助九郎
一中魚屋町	吉左衛門	一同町	太左衛門
一同町	作十郎	一金屋町	久左衛門
一北伊部町	勘四郎	一大手町	彦右衛門
一郡上町	與左衛門	一十軒町	市郎兵衛
一金屋新町	次太夫	一知善院町	與次兵衛
一宮町	太郎左衛門	一三ッ矢町	孫介
一同町	徳左衛門	一同町	吉右衛門
一北伊部町	九郎兵衛	一同町	六左衛門
一三ッ矢町	五郎右衛門	一西御堂前	善介
一東魚屋町	忠兵衛	一西北町	十兵衛
一同町	善兵衛	一横濱町	醫師升隆

一同 町 惣兵衛 一東御堂前 九兵衛

小野村民善行を賞せらる

村民一致の善行により賞せられし事なれば、人物傳中に記すべきに非ざれども、教生録に併記せられれば茲に附記す、

小野村民は村中何事にも一致協力し、儉素にして農業に精勵し、餘暇には山に入りて樵り、或は種々の副業に勉め、里正其他年寄役等の行爲も亦龜鑑とすべきものありて、寛政十一年二月六日、彦根藩主は村民一統に對して賞詞を下し、更に郡奉行をして酒肴を與へしめたり、

此他彦根藩が領内の孝行人を賞せし事少からず、然れども村志の記事に精略ありて、此篇に漏れたるもあるべし、又明治三年井伊直憲の領内を巡視せしに當りては、各村の篤行者を賞し、殊に孝人に對しては孝の字を紋所に記せし羽織地壹反づゝを與へたり、稱して孝紋附の羽織といふ、孝紋附の羽織を賞せられし人は左の三人、其村志に見ゆ、

一高番村 藤田左八 一門根村 田中甚吉

一番場村 堺善右衛門

何れも家寶として子孫に傳ふ、此他同藩主より至孝を以て賞を請けし人左の如し、

玄米三俵	番場村	酒井佐右衛門
金百疋	新庄村	須戸なみ
金二百疋米三俵	永久寺村	高野平治
米若干	同	吉川善七
米若干	同	西川傳三郎
米若干	同	中辻孫三郎

郡山藩内の旌表者

大和郡山の藩主柳澤氏も其領内の篤行者に對して賞を與へたり、其事蹟の詳なるもの左の如し、

文化十五年三月	一人扶持	柏原村	三六
明治三年二月	錢拾五貫	同	しめ
同	同	同	つる
同	同	同	與惣彌

村居源右衛門

九〇二

能登瀬村の人なり、父を助太夫といひ、母をみつといふ、至孝の名郷黨に高し、領主岡部氏其篤行を賞し、褒詞を與ふ、源右衛門明治二十五年一月卒す、年五十二、

北村久三郎

法性寺村大字世繼の人、天保八年三月三日を以て生る、家素と貧しかりしも、父母に仕へて至孝なり、郷黨以て範とす、萬延元年始めて飯村の伊部重平に仕ふ、人と爲り濃厚篤實、常に主家を以て我家となし、主人の財産を以て我財産となし、精勵倦まず、終始一貫、三世の主人に歴任すること五十二年、遂に年齢七十五歳を一期として、明治四十四年三月十三日、主家に於て遠逝せり、主人は爲に盛葬を營みて其功に報ひ、併せて後世子孫に傳へて、歳次氏のために祭祀を絶たず、其勞を追賞すべしと云ふ、主家は酒造と農商を業となせるが、初め第一の主人に仕ふるや、其の至誠は家政萬事自から之に任じ、終に年月の経過するを知らざるが如し、第二の主人重平は養嗣子なりければ、久三郎は所有地の境界より所藏品に至るまで、隈なく教へて倦まず、仕へて怠らざりき、主人七子ありしに、是等幼兒を待つこと吾子の如く、擲育指導す、故に子女は久三郎を家翁の如くし、父母の膝下を離れて、氏の看護を受けたり、而も雜役勞動怠らず、第三の主

人重平は實に氏の擲育と感化とを受けたる人なり、主人曰く、人は兩親を有せり、而かも子は三人の親あるが如しと、蓋し忠僕を尊親せる至言なり、久三郎終生妻帯せざるを以て、嗣子を養ふて家を繼がしめしに、嗣子は翁の財産を浪費し、貳百有餘圓の負債を残して離籍せり、されば翁は主人の補助と己が努力とを以て之を濟し終りぬ、更に第二の嗣子を養ひしに、翁が久しき歲月の間、零碎の給料を蓄積して、購ひ得たる田地貳段有餘を擔保に投じ、債を負ひて復離籍するの不幸を重ねたり、翁は自から奮て債務を辨じ、毫も他に累を及ばさず、遂に家を主家の地飯村に移轉し、主人より財産の分讓を受け、第三回の嗣子(名は興)を養ふに至れり、二世の主人嘗て數萬圓の損害を請けしが、其愁を共にし、自から進で曰く、僕多年莫大の厚恩に浴せり、今年年老い勞役に服すること能はざれども、主人の不幸を座視するに忍びず、報恩のため自今終生無給を以て仕へんと、爾來毫も給料を受くるを肯せざるなり、されば主人は慰勞の名稱の下に金錢を與ふることあれば、之を寺院に寄附し、或は社寺參拜の資に供するを常とせり、明治四十四年一月十日、久三郎は病の床に就き、主家にて病を養へり、されば主家の親屬並に氏の嘗て擲育したる主人の子女の他に嫁せるもの見舞品を贈り、看護をなすこと父母に對すると異ならざりければ、氏は涙に咽びて曰く、予貧翁にして豪家の

老人に等しき待遇を受く、實に感謝の辭なし、庶幾は今一度全治して採薪の勞を取り、以て萬分の恩に報いんことをと、主人は慰藉して曰く、唯汝多年の功勞に報ゆるのみ、幸に心を勞する勿れと、瀕死の前數日主人は氏に遺言を求む、氏曰く、曩に主人に預け置きたる蓄積金五圓を長澤別院の祖師遠忌の資に喜捨せられよと、主人は直ちに其意の如くし、之が領收證を示し、に、翁は欣然として曰く、他に云ふことなしと、明治三十八年七月、滋賀縣知事氏の篤行を賞したり、其文に

滋賀縣坂田郡法性寺村

北村久三郎

資性質朴にして温厚、克く父母に孝事す、萬延元年初めて居村伊部重兵衛に仕へ、歷事三世、忠實を竭し、拮据精勵、志操を變せざること、茲に四十餘年の久しき、猶一日の如し、洵に奇特に付、爲其賞大杯一組下賜候事、

明治三十八年七月一日

滋賀縣知事正五位勳四等鈴木定直

大谷派本願寺より左の表彰を受けたり、

北村久三郎

其許儀資性忠實にして、平素聞法篤志之趣、神妙の至に候、依之菊總念珠壹連被差遣候事、

明治三十八年九月二十日

相續講事務局

伊夫伎資彌

伊吹村の人なり、嘉永四年二月生る、幼名昇吉、後資彌と改む、天性實直にして不羈、家世に伊夫岐神社の祠官たりしを以て、明治五年六月其業を繼ぐ、國典に通じ、權中講義となれり、同二十年九月祠官を辭し、爾來公共の事に盡瘁す、村會議員、村長、所得稅調査委員、坂田東淺井兩郡聯合會議員、滋賀縣米質改良組合幹事、坂田郡名譽職參事、會員、郡農會副會頭に歴任し、滋賀縣會議員となること前後四回に及び、縣下に重望を負ふ、其他縣農會議員幹事、副會長、滋賀縣農工銀行取締役等各種の要職に就き、同三十六年三月衆議院議員に當選せしが、帝國議會解散の後、更に同三十七年三月再び衆議院議員に當選し、三十七八年戰役の功により、勳四等に叙せらる、同四十年一月滋賀縣農工銀行頭取となり、四十四年一月更に再選し、在職中同四十四年二月十四日病を以て卒す、年六十一、君本志編纂委員の一員たりしに、今や白玉樓中の人となり、傳を本志に列ぬる

事となれり、嗚呼悲哉、

吉田まつ

上丹生の人なり、篤行により明治三十一年八月一日、縣知事より賞を受く、其事蹟賞狀に詳なり、左の如し、

滋賀縣坂田郡雁井村

吉田ま津

資性貞實、夫武三郎難病ニ罹ルヤ、晝夜看護ニ從事シ、殊ニ貧困ノ中ニ在リテ、克ク數子ヲ教養シ、家業ヲ懈ラズ、二十餘年ノ久シキ志操一日ノ如シ、洵ニ奇特ニ付、爲其賞金五圓下賜候事、

明治三十一年八月一日

滋賀縣知事從四位勳三等折田平内

長濱勸業社の美舉

長濱勸業社は明治の初年勸業の目的を遂行せん爲に、同町有志の組織する所なりしが、同社の行蹟は管に勸業の事而已ならずして、博愛慈善の美舉少からざるを認む、即ち明治五年十一月十日、長濱町に大火災あり、家屋二百九十三戸を焼失す、勸業社の諸

氏は此の罹災に當り、相議して金二千圓を十箇年無利息にて罹災者に貸與し、之を以て材木を購入し、猶元價より二割の低値を以て賣與へたりしが、二千金猶不足せしを以て、更に六百圓を出して普く罹災者の需を満たしたり、明治六年三月松田縣令は左の賞狀を社員に與へたり、

長濱勸業社

- | | |
|-------|-------|
| 西川徳重郎 | 松本藤十郎 |
| 石井四郎平 | 片岡忠平 |
| 中村彌十郎 | 河路重平 |
| 中村喜平 | 大塚吉平 |
| 淺見又藏 | 杓水文内 |
| 瀧川善九郎 | 瀧川長平 |
| 松本九郎次 | 横田立吉 |

其會社義長濱町未曾有之火災に罹り、困難の折柄、金貳千圓十箇年無利子にて致出金、材木買入元價より二割の低價を以て焼亡の者へ賣渡候仕法相立、家作速に出來候様致盡力候に付、追々出金之者も有之、勸業の名義に相叶、奇特の事に候、依之其筋

へ伺候處、爲褒美金拾圓下賜候事、

明治六年三月

又

滋賀縣令松田道之

長濱勸業社中

(名義略す)

其方義昨壬申十一月、長濱町火災に付、闔社協議し、社金貳千圓を十箇年無利子にて、右延燒罹災之者へ貸遣候處、普く給し得ざるを以て、猶又闔社再議し、社金六百圓を前同徹にて貸遣等之義、全く其社の名義を不失段、畢竟平素心得方宜きより、然らしむる所實に篤志奇特の事に付、深賞與候事、

明治六年九月

滋賀縣令松田道之

明治十三年十月、淺井郡大濱村の火災に遇ふや、勸業社は金五十圓を其罹災民に贈れり、籠手田縣令之を嘉賞す、其文左の如し、

坂田郡長濱勸業社

(姓名を略す)

過般淺井郡大濱村火災之節、窮民救助として金五拾圓施與候段、奇特之事に付、爲賞木杯壹個下賜候事、

明治十三年十一月

滋賀縣令籠手田安定

明治十年西南役從軍者

○印は戦死 無印は凱旋
□印は病死 △印は負傷

- 柏原村 今川留吉 中嶋捨吉
- 春照村 ○小谷源彌 田中嘉六
- 伊吹村 △堀江平助 ○吉川良藏 伊富貴辰彌 藤井留彌
- 中川佐右衛門
- 大原村 脇坂諦道 岩嶋鶴治郎
- 東黒田村 ○三田村力松 辻捨吉 高森爲藏 山本松次郎
- 鹿取庄治郎 泉榮治郎
- 醒井村 △北川多八 □山口惣四郎
- 息長村 □古野清一 奥野定七
- 息郷村 米澤仙松 山本久吉
- 烏居本村 ○佐野捨彌 □寺西末吉 有川正信 伊藤祐公
- 西川金次郎 植田爲藏
- 入江村 從軍者なし

村名	大字	氏名	功勳等級
柏原	柏原	能政勘六	一步等卒兵
法性寺村	同上	同上	
日無村	同上	同上	
神田村	外海捨次郎		
西黑田村	富田小治郎	山中秀三	
六莊村	從軍者なし		
南郷里村	宮川與三郎	三輪鉞治郎	
北郷里村	影山太治郎	福嶋房吉	
神照村	中北善三郎	宮部友次郎	
長濱町	西堀乙治郎	森喜市	
	從軍者なし	中居源左衛門	
	岩崎重吉		
	中橋文五郎		
		渡邊貞治郎	
		井上彌七	
		田邊嘉吉	
		北川庄七	

第一章 明治二十七八年戰役從軍者

村名	大字	氏名	功勳等級
柏原	柏原	能政勘六	一步等卒兵
清瀧	山口喜代松		一步等卒兵
同	山口喜代松		一步等卒兵
同	西村末治郎		一步等卒兵
同	脇野庄吉		一步等卒兵
同	遠藤佐太郎		憲兵
同	山口助作		特務曹長
同	田中久三郎		一步等卒兵
同	吉田賢藏		一步等卒兵
同	中野龜吉		同
同	堀井熊治郎		一步等卒兵
同	上野傳彌		一步等卒兵
同	新井佐太郎		看護手
同	宮部千代吉		一步等卒兵
同	石田金三郎		一等理手
同	樋口幸治郎		二等理手
春照			同
大野龍音			伍步長兵
瀧上與惣藏			一步等卒兵
宮川末治郎			同
井上惣七			一步等卒兵
久保祐吉			同
宮川源七			一砲等卒兵
福永兵太郎			一步等卒兵
藤居友吉			同
西川由太郎			伍步長兵
小堀若太郎			上步等兵
宮川秋次郎			同
常喜算治郎			上工等兵
谷口庄七			同
兒玉永次郎			一步等卒兵
高木勘市			同
大野龍音			伍步長兵
瀧上與惣藏			一步等卒兵
宮川末治郎			同
井上惣七			一步等卒兵
久保祐吉			同
宮川源七			一砲等卒兵
福永兵太郎			一步等卒兵
藤居友吉			同
西川由太郎			伍步長兵
小堀若太郎			上步等兵
宮川秋次郎			同
常喜算治郎			上工等兵
谷口庄七			同
兒玉永次郎			一步等卒兵
高木勘市			同
大野龍音			伍步長兵
瀧上與惣藏			一步等卒兵
宮川末治郎			同
井上惣七			一步等卒兵
久保祐吉			同
宮川源七			一砲等卒兵
福永兵太郎			一步等卒兵
藤居友吉			同
西川由太郎			伍步長兵
小堀若太郎			上步等兵
宮川秋次郎			同
常喜算治郎			上工等兵
谷口庄七			同
兒玉永次郎			一步等卒兵
高木勘市			同

春照 同 同 伊吹 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大原

北村利三郎	橋本安太郎	松井秀吉	辻村與惣治	清水松治郎	田中實三郎	伊富貴忠治郎	大留與惣治郎	吉川留松	松井直市	高橋宇平	松井仙助	常喜乙松	仲谷久次良	中川平治郎
上憲等兵	三等主計部	同	一步等卒兵	一砲等卒兵	同	一步等卒兵	二步等卒兵	同	同	同	一步等卒兵	輪輻卒重	同	一步等卒兵
勤八等	勤正八八等位											勤七等		

大原 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

庄留吉	松居與惣治郎	中嶋與作	千葉政之助	鈴木善八	鈴木勘治郎	鈴木兵太郎	林留松	土田乙松	杉山兵吉	池田喜平	池田寅七	堀田勘治郎	堀田亭助	三浦安治郎
一步等卒兵	一騎等卒兵	軍曹兵	上步等兵	同	同	同	同	同	同	同	一步等卒兵	上步等兵	一步等卒兵	曹工長兵
勤八等	勤七等	勤七等	勤八等		勤八等	勤八等		勤八等		勤八等	勤七等	勤八等	勤八等	勤七等

大原 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東黒田

戸田淺藏	松居堅次郎	大橋友吉	山中歌治郎	堀居仙次郎	堀居卷太郎	堀居仲次郎	大久保三八	三澤勤六	吉田俊吉	大久保榮八郎	松田俊之助	大久保彌十郎	横田武一郎	竹岡捨太郎
一步等卒兵	上步等兵	一步等卒兵	特務曹長	上步等兵	上憲等兵	輪輻卒重	上憲等兵	上步等兵	二步等卒兵	上步等兵	同	一步等卒兵	軍曹兵	同
勤七等			勤七等	勤八等		同	同	勤七級		勤八等	勤八等	勤七等	勤七等	勤八等

東黒田 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

寺村善五郎	細田幸治郎	菅居與三郎	中川又治郎	富岡伊三郎	小野助次郎	高木松治良	志賀谷	西山	志賀谷	山室	北方	大鹿	北方	長岡	志賀谷	長岡	志賀谷	丸本幸市郎	吉川實治郎	
一步等卒兵	同	同	同	同	同	上步等兵	看護手	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	上步等兵	一步等卒兵	二步等卒兵
勤七等						勤七級												勤七等	勤七等	勤八等

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 入江

相宗留松	樋口富太郎	前川善彌	久木巳之助	小倉三喜吉	小堀兵藏	濱川惣三郎	杉村與惣次郎	北川政吉	八田春吉	北村末吉	北村太佐吉	樋口竹次郎	川部新吉	中關留吉
上步等兵	軍歩卒兵	輪輻卒重	同	同	一步等卒兵	同	輪輻卒重	同	同	一步等卒兵	同	軍歩卒兵	伍步長兵	上步等兵
功勳七級等	功勳七級等	卒重	勳八等	同	同	同	勳八等	同	同	勳八等	同	功勳七級等	勳八等	勳七等
入江	日撫	同	同	法性寺	同	同	同	同	同	神田	同	同	同	同

石原友藏	島田常太郎	田邊友治郎	須戶信治郎	北村菊松	小川長次郎	岡嶋留吉	今村甚次郎	宮崎捨次郎	增田常吉	西川安吉	茂森喜作	茂森太三郎	小川庄二郎	中川源治
輪輻卒重	上步等兵	一步等卒兵	同	軍歩卒兵	上步等兵	一步等卒兵	上輻等重兵	一步等卒兵	同	上步等兵	一步等卒兵	二步等卒兵	二砲等卒兵	輪輻卒重
勳七等	勳七等	勳八等	勳八等	勳七等	勳八等	勳七等	勳八等	同	同	勳八等	勳七等	勳八等	勳八等	勳七等

神田 同 西黒田 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

田中善吉	小川惣治郎	福永己之	中川喜四郎	中川志摩治郎	清水半助	武田儀三郎	戌玄熊太郎	富田與惣松	西川十太郎	富田半三郎	富田末治郎	奥田峯吉	鳥羽上
輪輻卒重	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	輪輻卒重	一步等卒兵	同	一步等卒兵	同	同	工等卒兵	軍歩卒兵	上步等兵	同
勳八等	勳七等	勳七等	勳七等	同	勳八等	同	同	同	同	同	勳七等	勳八等	同

淺尾政治郎	時田熊治郎	中尾竹治郎	池野金彌	若森半之助	若森淺治郎	川村仙彌	清水政治郎	川村竹治郎	上野定次郎	辻野久彌	横田熊二郎	中川捨松	中嶋捨吉
輪輻卒重	一步等卒兵	上步等兵	一步等卒兵	一砲等卒兵	上步等兵	二步等卒兵	一步等卒兵	一輻等重卒兵	一步等卒兵	同	一砲等卒兵	二步等卒兵	一重砲卒兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	北郷里	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里
		加納	今川	宮司	七條	宮司	加納	同	宮司	南小足	新榮	南小足	大東	宮司
八木	青木	宮本	小川	川崎	東野	那須	加納	安藤	若林	中嶋	吉田	川瀬	田中	粕淵
新三郎	文治郎	善兵衛	原次郎	傳次郎	捨松	善次郎	忠太	筆次郎	利三吉	外次良	十一	此吉	半助	定次郎
同	一步等卒兵	二步等卒兵	同	一步等卒兵	上步等卒兵	一步等卒兵	上步等卒兵	一縫等卒兵	輪輻卒重	一步等卒兵	上步等卒兵	輪輻卒重	二步等卒兵	一步等卒兵

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	北郷里
伏木	田邊	中北	宮宅	宮部	吉田	原馬	池崎	服部	小川	大塚	大塚	岩崎	一居	
豐三郎	與惣太郎	重吉	伊之吉	與惣七	要治郎	與作	源治郎	德太郎	曾右衛門	與惣次郎	常吉	國太郎	吉次郎	
伍步長兵	同野砲兵	上步等卒兵	伍步長兵	一步等卒兵	曹步長兵	同	一步等卒兵	一步等卒兵	上騎等卒兵	一步等卒兵	上步等卒兵	看一卒等	一步等卒兵	

同	同	同	南郷里	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	六莊
今川	榎木	七條	今川	川村	北居	野本	西田	廣内	西田	中川	中川	柴田	柴田	西川		
忠太郎	水源	江小	村正	居捨	與惣	德松	小治	小治	末治	甚吉	常吉	源藏	德次郎	庄之助		
軍步曹兵	上步等卒兵	軍步曹兵	曹野砲長兵	二步等卒兵	同	同	一步等卒兵	二步等卒兵	同	同	一步等卒兵	輪輻卒重	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里
南田	宮司	七條	南田	同	榎木	同	今川	新榮	南小	七條	大東	同	宮司	加納		
附泉	川村	中野	前田	北川	藤山	小川	小川	田附	松居	杉江	宮尾	德田	福永	金澤		
清治郎	泰造	重治郎	要三郎	辰次郎	兵太郎	龜太郎	恒	永治郎	喜太郎	末吉	正幸	爲次郎	政太郎	捨太郎		
一步等卒兵	軍步曹兵	上步等卒兵	輪輻卒重	一步等卒兵	同	一步等卒兵	二經理部卒兵	一騎等卒兵	一步等卒兵	二步等卒兵	一步等卒兵	同	二步等卒兵	一步等卒兵		

北郷里 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 神照

伏木重次郎	一乘俊成	名内惣五郎	坂本原次郎	西尾貞次郎	曾我次七	菅原碩壽	藤田與三良	服部太與次	平岩常吉	宮地太吉	徳田甚太郎	金澤由松	飯田豊市	服部市三郎
一步卒兵	一騎卒兵	一步卒兵	同	同	上歩卒兵	二騎卒兵	伍歩卒兵	一步卒兵	同	軍工卒兵	軍歩卒兵	輪輻卒兵	伍歩卒兵	曹砲卒兵

神照 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

宮村勘七	中山巳之助	北川辰治郎	大谷賢海	藤居彌市	宮村平治郎	高田外市	西濱文吉	田中辰次郎	岩島藤平	藤居徳松	○森又藏	○森太市郎	森増次郎	○高田駒吉
一步卒兵	輪輻卒兵	一步卒兵	二看長卒兵	歩兵中尉	一步卒兵	同	上歩卒兵	一步卒兵	一輻卒兵	一步卒兵	同	同	上歩卒兵	一步卒兵

神照 同 同 同 同 同 同 同 長濱町 同 同 同

○富田龜吉	中川清彌	○宮村勘四郎	藤居由藏	平岩由太郎	中川菊治郎	奥澤與惣治郎	岩田兼吉	伊藤尙治郎
一步卒兵	同	二歩卒兵	軍歩卒兵	一步卒兵	同	同	上工卒兵	上歩卒兵

長濱町 同 同 同 同 同 同 同 同 同

藤居留次郎	細川彌作	伊藤巳之吉	木戸源藏	西島拾吉	千田勇助	木下卯三郎	萩田熊次郎
一工卒兵	一步卒兵	同	曹憲長兵	上砲卒兵	一步卒兵	同	上歩卒兵

明治三十七八年戰役従軍者

明治三十七八年の役は前二役に比し、出征人員頗る多く、而して名譽の戦死者も亦太だ多し、故に先づ戦病死軍人の氏名を列記し、次に凱旋軍人の氏名を録す、

戦病死軍人一覽表

町村大字名	氏名	兵科等級	戦病死	戦病死ノ場所	位記勳章等種類
柏原村	梓河内 小谷好祐	上歩兵	戰病死	得利寺戰	勳八等

大原村	間田	松田仲次	一步等卒兵	戰	三七一〇・二四	林盛堡戰	九二四	勳八等
同	市場	北村實三郎	上步等兵	戰	三七一〇・二五	李大人屯戰		勳七等 功七級
同	朝日	大橋彦治	輪輻卒重	病	三七一二・二五	大阪豫備病院		
同	村居田	塚本庄七	上步等兵	病	三八〇二・〇八	遼陽兵站病院		勳八等
同	天滿	千葉政之助	上步等兵	戰	三八〇三・〇一	北臺子附近戰		勳八等
同	間田	大久保與作	一步等卒兵	戰	三八〇三・〇二	小貴興堡戰		勳八等
同	井ノ口	丸岡才助	輪輻卒重	病	三八〇九・〇二	連山關療養所		
東黒田村	山室	竹田庄吉	上步等兵	戰	三七〇八・二二	東雞冠山北砲臺戰		勳八等 功七級
同	長岡	田中辨治	軍步曹兵	戰	三七〇八・二三	東雞冠山北砲臺盤龍山砲臺 ノ中間戰		勳七等 功七級
同	長岡	吉川實治郎	上步等兵	戰	三七〇八・二三	東雞冠山戰		勳八等 功七級
同	北方	久保田專三	伍步長兵	戰	三七〇八・二四	盤龍山西砲台戰		勳八等 功七級
同	菅江	中森與惣吉	上步等兵	戰	三七〇八・二四	盤龍山西砲台戰		勳八等 功七級
同	長岡	松田祐歡	看護卒	病	三八〇一・二五	春堆子野戰病院		勳八等 功七級
同	北方	杉山伊太郎	曹步長兵	戰	三八〇三・〇二	北臺子戰		勳七等 功七級
同	長岡	寺田惣八	一步等卒兵	戰	三八〇三・〇二	荒地戰		勳八等

同	志賀谷	井關五右衛門	上步等兵	戰	三八〇三・〇四	來神堡戰	九二五	勳八等
醒井村	一	岡野茂逸	曹步長兵	戰	三七〇四・二六	新浦沖ニテ敵艦ニ遭遇ノ際		勳七等 功七級
同	下丹生	山口惣吉	上步等兵	戰	三八〇二・二八	狐洞溝兵站病院ニ於テ負傷ノ爲入院		勳七等 功七級
同	醒井	坪田平三郎	上步等兵	戰	三八〇三・〇七	同		勳八等 功七級
同	下丹生	西川清	上步等兵	病	三八〇一・二六	大房身舍營病院		勳八等
同	上丹生	山田吉之助	二步等卒兵	病	三八〇二・二六	阿部野分院		勳八等
息鄉村	番場	田中林之助	上步等兵	戰	三七〇六・二六	金洲南山		勳八等
同	三吉	山脇才次郎	伍步長兵	戰	三七〇八・二三	東雞冠山北砲台		勳八等 功七級
同	樋口	樋口捨次郎	輪輻卒重	病	三七〇九・〇五	青泥窪兵站病院		勳八等
同	番場	酒井源四郎	上步等兵	戰	三八〇三・〇二	北臺子		勳八等 功七級
同	牛打	鹿取文右衛門	一步等卒兵	戰	三八〇三・〇七	小貴興堡		勳八等
同	樋口	山口竹次郎	曹步長兵	戰	三八〇三・一〇	奉天附近		勳七等 功七級
同	番場	兒玉末吉	輪輻卒重	病	三八〇八・〇七	前四方台患者療養所		
同	三吉	井上榮五郎	輪輻卒重	病	三八〇九・〇七	大阪豫備病院		
鳥居本村	男鬼	大久保藤五郎	一步等卒兵	戰	三七〇八・二二	東雞冠山北砲台		勳八等

鳥居本村佛生寺	伊戸惣次郎	上砲等兵	三七〇九三	揚家林子	勳八等 功七級
同 小野	小野源次	上砲等兵	三七一〇四	青泥窪兵站病院	勳八等
同 莊嚴寺	田中重太郎	上歩等兵	三八〇三〇	北台子	勳八等
同 中山	北村榮助	上歩等兵	三八〇三〇	同	勳八等 功七級
同 莊嚴寺	岩崎外彌	上歩等兵	三八〇三〇	同負傷後	勳八等 功七級
同 鳥居本	横田十太郎	一步等卒兵	三八〇三七	小貴與堡負傷後	勳八等 功七級
同 鳥居本	岩崎吉左衛門	一步等卒兵	三八〇三七	小貴與堡負傷後	勳八等 功七級
同 同	成宮末次郎	輪幅卒重	三八〇三八	蘇胡堡立病院	勳八等
同 中山	北村増治郎	輪幅卒重	三八〇三四	遼海屯舍營地	勳八等
同 鳥居本	寺村初次郎	上歩等兵	三八〇八四	盤龍山西東兩砲台間	勳八等 功七級
同 佛生寺	小野始次郎	一步等卒兵	三八一一九	黑溝台附近	勳八等
入江村朝妻筑摩	北村繁松	上歩等兵	三七〇六五	得利寺	勳八等
同 儀	儀崎常吉	上歩等兵	三七〇八三	東雞冠山砲臺下盤龍山砲臺 トノ中間戰	勳八等
同 朝妻筑摩	相宗留松	上歩等兵	三七〇九〇	青泥窪兵站病院	勳八等 功七級
同 儀	平居久松	輪幅卒重	三七〇九五	遼陽パンツヤンヤニ負傷後	勳八等

同 米原	小川末吉	輪幅卒重	三七二〇九	遼陽兵站病院	勳八等 功七級
同 朝妻筑摩	中川徳次郎	上歩等兵	三八〇一一	盤龍山東砲台	勳八等 功七級
同 上多良	西川傳次郎	伍歩長兵	三八〇二六	姚千戸屯附近	勳八等 功七級
同 同	樋口富太郎	軍歩曹兵	三八〇三二	北台子附近三父子	勳七等 功七級
同 朝妻筑摩	荒尾末松	伍歩長兵	三八〇三九	三父子	勳八等 功七級
同 上多良	中西久彌	伍歩長兵	三八〇七三	朱家屯	勳七等 功七級
同 梅ヶ原	久米耕次郎	輪幅卒重	三八〇八一	遼陽兵站病院	勳八等
同 米原	國領末次郎	上歩等兵	三八二〇八	太平溝舍營病院	勳八等
法性寺村世繼	小川周太郎	一步等卒兵	三七〇八二	東雞冠山北砲台	勳八等 功七級
同 長澤	田部佐吉	上歩等兵	三七〇八三	同	勳八等 功七級
同 長澤	木澤末吉	二歩等卒兵	三七二〇四	林盛堡	勳八等 功七級
同 長澤	高橋善彌	上歩等兵	三七〇八四	盤龍山西東兩砲台間	勳八等 功七級
同 宇賀野	黒川米三郎	上歩等兵	三八〇三〇	北臺子	勳八等 功七級
同 世繼	中村四郎太	上歩等兵	三八〇三〇	同	勳八等 功七級
息長村 能登瀬	平居寅之助	一步等卒兵	三七〇五二	金州南山	勳八等 功七級

同	同	同	同	神照村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
國友	今	口分田	國友	保田	榎木	加納	宮司	新榮	南小足	七條	宮司	同	加納	榎木			
佐々生金次郎	中川清作	井上辰治郎	伴秀吉	大谷惣藤市	藤山孫助	加納辨治郎	川村重藏	田附永治郎	松居喜太郎	井關治郎吉	門野國松	加納萬藏	加納安三郎	松波龜三郎			
曹歩	上歩	伍歩	一歩	上歩	上歩	上歩	上歩	一騎	一騎	一歩	上歩	上歩	伍歩	伍歩			
長兵	兵	長兵	卒兵	兵	兵	兵	兵	卒兵	卒兵	卒兵	兵	兵	長兵	長兵			
戰	戰	戰	戰	戰	病	病	病	病	病	戰	戰	戰	戰	病			
三七〇八三	三七〇八三	三七〇八三	三七〇五二	三七〇五二	三九〇三八	三八〇四四	三八〇四四	三八〇一七	三八〇三三	三八〇三五	三八〇三六	三八〇三二	三八〇三二	三八〇二七			
同	同	東鷄冠山	南山	南山	第二韓國駐劄病院會寧病院	四方臺忠者療養所	慶雲堡舍營病院	蘇胡堡定立病院	南鄉里村南小足	漢城堡附近	奉天省後小煙臺定立病院	北台子附近	北台子附近	清國三家子			
勳七等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等			
功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級			

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
宮司	七條	小堀	七條	加納	大東	南鄉里村石田	保多	垣龍	同	同	同	同	同	同	同	同	同
前田要治郎	杉江謙治	荒田健藏	杉江末吉	金澤左玄	宮尾正幸	吉田要治郎	堤幸治郎	川崎五太郎	奧川助市	佐分利榮太郎	原馬與作	池崎源次郎	北川多三郎	北川多三郎	岩瀬金次郎	六莊村四塚	
輪幅	二砲	輪幅	一歩	一歩	上歩	歩少尉	輪幅	上歩	一歩	軍歩	一歩	一歩	一歩	一歩	二歩	二歩	
卒重	卒兵	卒重	卒兵	卒兵	兵	尉	卒重	兵	卒兵	曹兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	
病	病	溺	戰	戰	戰	病	病	戰	戰	戰	戰	戰	病	病	病	病	
三七二二三	三七二〇七	三七二〇七	三七〇九八	三七〇八二	三七〇八二	三八〇三八	三八〇三五	三八〇三二	三八〇三二	三八〇三二	三八〇二六	三七〇八二	三八〇二二	三八〇二二	三八〇一九	三八〇一九	
鳳凰城兵站病院	大阪備前病院福良分院	奉天省大勺井口	ダルニ病院	五家房附近	五家房附近	盛京省田義屯附近	遼陽兵站病院	北台子附近	北台子附近	北台子附近	盤龍山西砲臺附近	東雞冠山北砲臺	盛京省廣福屯附近	盛京省廣福屯附近	塞馬集病院	塞馬集病院	
				勳八等	勳八等	勳六等		勳八等	勳八等	勳七等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	
				功七級	功七級	功五級		功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	

神照村 下々郷	澤村 忠七	曹歩長兵	二七〇八三	東鷄冠山	勳七等 功七級
同 相撲	藤田 忠五郎	上歩等兵	三七〇八四	盤龍山	勳八等 功七級
同 八幡中山	藪内 清一	伍歩長兵	三七〇九三	青泥窪	勳七等
同 祇園	中村 利三郎	一步等卒兵	三七〇九三	青泥窪	勳八等
同 今	中川 由三郎	二歩等卒兵	三七二二一	遼陽	勳八等
同 南方	安達 熊次郎	軍歩曹兵	三八〇三二	北臺子	勳七等 功七級
同 今	中川 米造	上歩等兵	三八〇三二	同	勳八等
同 相撲	藤居 清一	曹歩長兵	三八〇三四	來神堡	勳七等 功七級
同 八幡中山	中野 末治郎	上歩等兵	二六〇三七	小貴興堡	勳八等 功七級
同 國友	小林 重平	上歩等兵	二六〇三八	北臺子	勳八等 功七級
同 馬場	川上 五左衛門	輪輻卒重兵	二六〇四九	遼陽	勳八等 功七級
同 國友	長尾 外治郎	二歩等卒兵	二六〇五三	安東縣	勳八等
同 今	宇野 惣助	輪輻卒重兵	二六〇八九	高力屯	勳八等
同 新庄中	中川 喜原	二歩等卒兵	二六〇九七	茨林子	勳八等
長濱町	矢野 清吉	上歩等兵	二七〇六六	得利寺附近	勳八等

同 田	堀 宇太幅	一步等卒兵	二七〇八〇	青泥窪病院	勳八等 功七級
同 郡上	川瀬 文助	上歩等兵	二七〇八二	大阪野戰病院	勳八等
同 同	香取 庄三郎	一步等卒兵	二七〇八二	五家房附近	勳八等
同 三ッ矢	井辻 又吉	上歩等兵	二七〇八二	東鷄冠山北砲臺附近	勳八等 功七級
同 横	武藤 長次郎	特務曹長	二七〇九八	鞍山屯患者療養所	勳七等
同 田	辻 彌市	海軍一等	二七〇九四	歸郷療養中	勳八等
同 神前	川村 松三郎	輪輻卒重兵	二七二〇九	青泥窪兵站病院	勳八等
同 北吳服	土川 政次郎	二歩等卒兵	二六〇二九	西八里庄遼陽兵站病院	勳八等
同 相生	中村 要次郎	上歩等兵	二六〇三二	北臺子附近	勳八等 功七級
同 相生	川瀬 虎太郎	上歩等兵	二六〇三四	來神堡附近	勳八等 功七級
同 東本	星野 松次郎	一步等卒兵	二六〇三七	奉天附近	勳八等
同 相生	外村 吉松	上歩等兵	二六〇三八	官林堡舍營病院	勳八等 功七級
同 米川	渡邊 龜吉	上歩等兵	二六〇三八	奉天省大小方士功	勳八等
同 祝	西村 清治郎	輪輻卒重兵	二六〇七九	歸宅療養中	勳八等
同 三ッ矢	居長 捨三郎	一步等卒兵	二六〇八九	奉天兵站病院	勳八等

長濱町	三ツ矢	山村金治郎	上歩兵	戰	三〇八三	盤龍山東砲臺附近	勳八等	功七級
同	横	中野彥次郎	上歩兵	戰	三〇八三	同	勳八等	功七級
同	錦	川村平藏	上歩兵	病	三〇八三	三家子舍營病院	勳八等	功七級
同	紺屋	細溝常治郎	上歩兵	病	三〇八三	揚家油房舍營病院	勳八等	

凱旋軍人一覽表 陸軍之部

町村大字名	氏名	兵科等級	位記勳章種類	町村大字名	氏名	兵科等級	位記勳章種類
柏原村	清瀧山口助作	特務曹長	勳七等	柏原村	大野木岡部文治	上歩兵	勳八等
同	大野木水野新六	特務曹長	勳七等	同	清瀧堀井熊治郎	上歩兵	勳八等
同	大野木末信出雲	特務曹長	勳七等	同	柏原深田半次郎	上歩兵	勳八等
同	梓河内小谷藤三郎	曹長	勳七等	同	清瀧堀井忠三郎	上歩兵	勳八等
同	梓河内石田金三郎	計手	勳七等	同	梓河内山口太吉	上歩兵	勳八等
同	柏原山口喜代松	曹兵	勳七等	同	清瀧堀井種七	上歩兵	勳八等
同	須川山口熊太郎	曹兵	勳七等	同	柏原三輪多七	上歩兵	勳八等
同	長久寺遠藤佐太郎	曹兵	勳八等	同	大野木伊藤嘉藤治	上騎兵	勳八等
同	大野木田中久三郎	伍長	勳八等	同	長久寺中島彌三郎	上工兵	勳八等

町村大字名	氏名	兵科等級	位記勳章種類	町村大字名	氏名	兵科等級	位記勳章種類
柏原村	柏原石丸龍省	看護手	勳八等	柏原村	柏原山根吉藏	一歩卒兵	勳八等
同	柏原西村末治郎	一歩卒兵	勳八等	同	柏原久保田瀨治郎	一歩卒兵	勳八等
同	清瀧吉田賢藏	一歩卒兵	勳八等	同	柏原上野常吉	一歩卒兵	勳八等
同	柏原中野龜吉	一歩卒兵	勳八等	同	梓河内保正伍一	一歩卒兵	勳八等
同	柏原岩田太吉	一歩卒兵	勳八等	同	柏原横川新治郎	一歩卒兵	勳八等
同	柏原吉田定市	一歩卒兵	勳八等	同	長久寺川口佐吉	一歩卒兵	勳八等
同	柏原仁木兵吉	一歩卒兵	勳八等	同	梓河内石田民藏	一歩卒兵	勳八等
同	柏原山尾猪之吉	一歩卒兵	勳八等	同	清瀧増田良助	一歩卒兵	勳八等
同	長久寺早崎圓治郎	一歩卒兵	勳八等	同	大野木澤重三郎	一歩卒兵	勳八等
同	長久寺吉田喜三郎	一歩卒兵	勳八等	同	大野木川本與三郎	一歩卒兵	勳八等
同	柏原畑中秀松	一歩卒兵	勳八等	同	大野木北澤林之助	一歩卒兵	勳八等
同	柏原西村與吉	一歩卒兵	勳八等	同	大野木山本仁市	一歩卒兵	勳八等
同	柏原能政勘六	一歩卒兵	勳八等	同	大野木山田辨次	一歩卒兵	勳八等
同	清瀧山尾孫三郎	一歩卒兵	勳八等	同	大野木樋口善之輔	一歩卒兵	勳八等
同	柏原川村寅藏	一歩卒兵	勳八等	同	長久寺吉田松太郎	一砲卒兵	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	伊吹村	同	同	同	同	同	同	同	春照村
伊吹	小泉	上野	上野	伊吹	上野	太平寺	伊吹	上野	伊吹	伊吹	春照	春照	大清水	大清水	上野	藤川		
膽木	泉村	野松	野松	伊吹	高橋	三原	石河	瀧澤	堀井	谷川	伊藤	伊藤	上津	尾木	谷口	池上		
吹長	木甚	松井	松井	伊吹	高橋	三原	石河	瀧澤	堀井	谷川	伊藤	伊藤	上津	尾木	谷口	池上		
吹長	木甚	松井	松井	伊吹	高橋	三原	石河	瀧澤	堀井	谷川	伊藤	伊藤	上津	尾木	谷口	池上		
吾	吾	平	恒	忠治	宇平	久作	外治	長治	千吉	留治	與市	與市	藤次	德次	米太郎	左衛門		
上輜	上砲	上步	上步	上步	上步	伍步	伍步	軍步	曹步	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜		
等重	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	長兵	長兵	曹兵	長兵	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重		
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵		
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳八等		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
上野	彌高	大久保	上野	小泉	上野	彌高	太平寺	上野	伊吹	上野	伊吹	上野	上野	彌高	伊吹			
小川	藤敦	辻村	野森	泉辻	野松	高大	三原	野森	大留	松井	井直	井直	吉末	石川	伊吹			
亦五	泰治	與惣	丈助	本藤	井伊	橋德	原直	川與	留與	吹泰	吹泰	末吉	末吉	大藏	富貴			
郎	郎	治	助	七	治	市	松	郎	郎	郎	郎	郎	郎	藏	守正			
一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	上輜			
等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等重			
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵			
勳八等	勳七級	勳八等	勳七級	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等			

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	春照村
村木	春照	春照	杉澤	春照	杉澤	春照	藤川	杉澤	春照	藤川	杉澤	春照	杉澤	村木	大清水	高番	高番	
森	的場	谷川	藤田	福永	辻橋	木原	中川	辻村	福永	武田	林彌	武田	上津	上津	田中	筒井		
德之	林右	留左	富十	政藏	善四	藤重	末太	喜三	勝三	長三	彌藤	長三	音之	音之	沖之	常太		
進	衛門	衛門	郎	藏	郎	郎	郎	郎	郎	郎	治	郎	進	進	丞	郎		
二步	二步	二步	二步	二步	二步	一工	一砲	一砲	一砲	一砲	一砲	一砲	一步	一步	一步	一步		
等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒		
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵		
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
大清水	村木	杉澤	杉澤	上野	藤川	大清水	春照	上野	藤川	藤川	大清水	大清水	春照	大清水	中野			
尾木	中西	山崎	稻村	山本	暖水	上津	的場	寺田	大谷	藤居	馬場	多賀	谷川	野光				
源十	西芳	源五	村甚	本十四	留太	久作	政吉	源太郎	光三	彦右	慶太	繁太	川五	治郎				
郎	郎	郎	六	太郎	太郎	作	吉	郎	郎	衛門	太郎	太郎	郎	郎				
輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	二騎	二步				
卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	等卒	等卒				
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵				
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等				

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東黑田村
西山	大鹿	山室	常谷	長岡	常谷	大鹿	山室	山室	山室	山室	山室	山室	山室	山室	山室	山室
中川	太田	細井	口分	鹿取	箕浦	中西	小谷	細溝	細溝	大橋	大橋	梶田	梶田	梶田	梶田	細溝
留吉	幸太郎	藤市郎	田爲吉	甚七	宗一	瀧三郎	安太郎	仙太郎	辨藏	好治	昇太郎	國太郎	國太郎	國太郎	國太郎	仲次郎
二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	二砲等卒兵	一工等卒兵	一工等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵
			勳七級等	勳八等						勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東黑田村
山室	山室	菅江	菅江	北方	北方	北方	本郷	志賀谷	志賀谷	志賀谷	志賀谷	長岡	本郷	常谷	常谷	常谷
大橋	細溝	久保田	中森	杉山	居林	杉山	三田村	井關	岩崎	嶋田	井關	古池	荒尾	口分	口分	口分
儀藏	時造	富三良	清四郎	國太郎	留次郎	定次郎	四郎吉	捨三郎	清七	佐吉	常三郎	宗之	寅造	逸造	逸造	逸造
九四七	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重
	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東黑田村
大鹿	山室	山室	菅江	北方	北方	北方	北方	長岡	長岡	長岡	長岡	長岡	長岡	長岡	長岡	長岡
太田	細溝	大橋	中森	白石	寺村	奥谷	大橋	日向	川幡	細田	川幡	古川	古川	古川	古川	古池
佐太郎	仲藏	賢治郎	半之助	秀次郎	延輔	與惣松	泰治郎	秀三	淺吉	傳次郎	留松	伊助	伊助	伊助	伊助	賢三
一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東黑田村
西山	長岡	長岡	長岡	西山	西山	西山	長岡	常谷	常谷	常谷	常谷	大鹿	大鹿	大鹿	大鹿	大鹿
小野	菅居	細田	丸本	野澤	淺岡	野澤	川瀬	藤岡	谷口	横山	常喜	奧原	奧原	奧原	奧原	奧原
助次郎	與三郎	幸次郎	幸十良	吉彌	嘉助	嘉助	松藏	俊之丈	芳松	吉藏	藤内	次郎	七之助	七之助	七之助	西專左衛門
一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵
			勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	神田村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	法性寺村
加田	加田	加田	加田	長澤	宇賀野	飯	世繼	宇賀野	世繼	長澤	世繼	飯	世繼	長澤	長澤
小八木	茂森	西川	森友	田邊	木田	成宮	北村	夏原	北村	高橋	福井	日比	小川	高橋	高橋
房吉	太三郎	安吉	友吉	八次郎	字助	常治	寅吉	宗治郎	辰彌	常吉	梅吉	比葛吉	常吉	辰吉	辰吉
上步	上步	伍步	伍步	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻
等兵	等兵	長兵	長兵	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重
勳八等	勳八等	勳七等	勳七等		勳八等			勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	神田村
加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田
小川	茂森	川崎	茂森	田中	藤居	中川	中川	茂森	西村	早瀬	東野	藤居	茂森	田中文	田中文
庄二	清七	政吉	喜作	末吉	惣左衛門	藤助	文左衛門	儀三郎	安吉	孝廉	平次郎	源三郎	太吉	四郎	四郎
一砲	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	上騎	上步	上步	上步
等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵	等兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	法性寺村
長澤	飯	長澤	宇賀野	世繼	宇賀野	世繼	宇賀野	世繼	宇賀野	世繼	宇賀野	世繼	宇賀野	世繼	宇賀野	宇賀野
奧田	成川	北澤	遠藤	福居	谷村	世森	堤與	北村	增田	喜田	北村	喜田	喜田	喜田	喜田	木村
留吉	源七	太市郎	喜右衛門	庄太郎	勇治郎	捨松	與吉	安治郎	善右衛門	鐵太郎	孟三郎	太市郎	太市郎	太市郎	鐵次郎	仙太郎
一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步
等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒	等卒
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	法性寺村
世繼	宇賀野	飯	飯	長澤	宇賀野	世繼	宇賀野	宇賀野	長澤	宇賀野	長澤	長澤	長澤	長澤	長澤	長澤
北村	北村	山村	山村	田邊	三田村	北村	北村	北村	藤居	喜田	木村	北村	長野	北村	北村	北村
平右衛門	新三郎	房治郎	明次郎	金一輔	又三郎	傳治郎	龜治郎	源太郎	宗重郎	太佐治郎	伊平治	源七	平太郎	傳治郎	傳治郎	
輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	二輻	二砲	二砲	二砲	二砲	二步	二步	一騎	一步	一步	一步	一步	一步
卒重	卒重	卒重	卒重	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	日撫村
高溝	顏戶	顏戶	顏戶	顏戶	舟崎	高溝	顏戶	顏戶	高溝	顏戶	顏戶	顏戶	顏戶	顏戶	顏戶	顏戶	顏戶
高田清治郎	森澤藤一郎	樋口正次郎	横田辰造	西川清太夫	田口金次	西澤米治郎	嶋田清吉	築山清吉	嶋田彌三郎	田中市太郎	横田辰次郎	嶋田捨三	須藤友治郎	有川佐平	有川佐平	有川佐平	
輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	二工等卒兵	二砲等卒兵	二步等卒兵	一輻等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	
卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	日撫村	
新庄	能登瀨	寺倉	西圓寺	箕浦	日光寺	能登瀨	多和田	新庄	箕浦	西圓寺	箕浦	箕浦	顏戶	高溝	高溝	高溝	
北川新太郎	樋口仙之助	廳田治太郎	松岡文吉	澤村榮一	中村秀治郎	樋口安次郎	北川留治郎	前川榮太郎	濱庄之助	小路定次郎	井戶村房次郎	吉村房次郎	須藤源治郎	柏淵藤治郎	高溝	高溝	
上步等兵	上步等兵	上步等兵	上步等兵	伍砲長兵	伍砲長兵	伍砲長兵	軍砲曹兵	軍砲曹兵	軍砲曹兵	軍砲曹兵	少步尉兵	少步尉兵	看護卒	輪輻卒	輪輻卒	輪輻卒	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	神田村
顏戶	顏戶	顏戶	高溝	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田	加田
森泰次郎	島田常太郎	平等卯三郎	二國藤太郎	西堀正三	中川源治	田中善吉	吉岡與惣二	坂東清太郎	北川庄助	坂東三次郎	西堀藤二郎	大橋松右衛門	谷口爲吉	加田今茂	加田今茂	加田今茂	
上步等兵	上步等兵	上步等兵	伍步長兵	輪輻卒	輪輻卒	輪輻卒	輪輻卒	輪輻卒	輪輻卒	輪輻卒	輪輻卒	二工等卒兵	二步等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	
勳八等	勳七等	勳八等	功勳七級	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	日撫村	
高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	高溝	
岡嶋宇兵衛	中野源之助	山田柴治郎	中川菊松	柏淵藤太郎	木崎鉄治郎	中川泰次郎	中野助藏	村居菊次郎	須藤菊藏	須藤末太郎	夏原太一郎	田邊友治郎	奥野捨松	顏戶松居傳一	顏戶松居傳一	顏戶松居傳一	
一砲等卒兵	一砲等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	息長村
多和田	多和田	多和田	多和田	多和田	新庄	能登瀨	能登瀨	岩脇	岩脇	西圓寺	西圓寺	岩脇	日光寺	能登瀨
北川	池田	澤力	法戸	北川	松居	高居	喜田	大岩	山村	仁科	廣田	明石	大林	喜田
孫助	長彌	松平	治平	市治郎	藤八郎	勝治郎	文六郎	秀造	新太郎	長助	藤五郎	富治郎	伊三郎	龍太郎
一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	息長村
箕浦	岩脇	新庄	箕浦	多和田	多和田	新庄	寺倉	岩脇	多和田	多和田	多和田	多和田	多和田	多和田	多和田
山田	山脇	安食	西野	北川	清水	川嶋	廣田	横田	吉田	北川	原田	池田	北川	原田	原田
藤吉	源之助	善吾	忠次	長九郎	武左衛門	茂太郎	與惣五郎	甚藏	彦治郎	捨治郎	又三郎	源七	武一	忠太郎	樋口
二步等卒兵	二步等卒兵	二步等卒兵	二步等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一砲等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	息長村		
箕浦	岩脇	寺倉	岩脇	箕浦	岩脇	日光寺	寺倉	岩脇	箕浦	箕浦	箕浦	岩脇	岩脇	箕浦	箕浦	岩脇	多和田	能登瀨
澤田	伊部	音居	山村	橋本	久保	奧村	竹井	奧野	横田	西野	澤村	北村	北村	澤村	澤村	北村	庄司	吉野
喜太郎	軍次郎	信太郎	善次郎	善治郎	田寅吉	熊次郎	與惣松	惣次	彌吉	清二郎	鐵藏	信藏	信藏	鐵藏	鐵藏	信藏	喜代太	野外治郎
一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等	勳七等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	息長村
日光寺	箕浦	箕浦	岩脇	新庄	新庄	岩脇	能登瀨	寺倉	能登瀨	岩脇	能登瀨	新庄	日光寺	能登瀨	能登瀨	能登瀨	能登瀨	能登瀨
中村	澤	吉居	横田	前川	小川	立木	古河	木田	淺見	奧野	木田	木邑	樋口	樋口	樋口	樋口	樋口	樋口
繁次郎	辰治郎	彌市郎	三之助	庄治郎	友治郎	清太郎	政治郎	寅藏	鐵三郎	長平	清内	金十郎	信雄	信雄	信雄	信雄	信雄	前太郎
一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	醒井村
樽ヶ畑	樽ヶ畑	上丹生	下丹生	樽ヶ畑	下丹生	上丹生	上丹生	上丹生	枝折	枝折	枝折	枝折	枝折	一色	醒井北川又吉
森	圓花君	上田三四郎	池田清	近藤重三郎	河内末吉	山口彦松	上田治郎吉	西出佐次郎	吉田留次郎	中島善右衛門	伊藤増太郎	山口多七	山形甚六	北川又吉	
輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	砲	輜	輜	輜	輜	輜	輜	
卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒兵	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	醒井村	
西上坂	小屋	東上坂	石田	石田	堀部	保田	西上坂	西上坂	春近	東上坂	堀部	堀部	菅原	上丹生	
曾我次七	三輪彌太郎	田中新八郎	一居吉次郎	木下順三	間塚幸治郎	大塚常吉	中島民藏	宮宅伊之吉	矢野喜近	服部徳太郎	間塚寅三郎	菅原碩壽	森茂三	吉田傳七	
輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	輜	計	軍	軍	軍	曹	輜	
卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等	勳七等	勳七等	勳七等	勳八等	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	醒井村
下丹生	樽ヶ畑	上丹生	下丹生	樽ヶ畑	樽ヶ畑	上丹生	下丹生	樽ヶ畑	上丹生	上丹生	樽ヶ畑	上丹生	上丹生	上丹生	醒井龍谷房吉
田口准二	山崎久藏	近藤一雄	池田安太郎	川崎惣左衛門	川崎惣左衛門	西村卯平	後藤豊丸	大林上松	山田吉藏	奧村忠四郎	田中新九郎	清水傳藏	龍谷房吉	龍谷房吉	
一騎	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	一步	
卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	醒井村	
一色	一色	一色	一色	醒井	枝折	下丹生	下丹生	下丹生	樽ヶ畑	下丹生	樽ヶ畑	下丹生	下丹生	上丹生	
山本彦次郎	鏑田庄八郎	吉田惣次郎	鏑田伊三郎	山中兵治	山岸米藏	青木豐吉	山口新藏	山田忠七	竹林武右衛門	山口彌太郎	大久保藤治	池田善七	江龍喜之助	武立新藏	
輜	輜	輜	輜	輜	砲	砲	砲	砲	砲	砲	砲	砲	工	工	
卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	卒兵	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村南田附
南田附	小堀	加納	榎木	加納	新榮	今川	宮司	宮司	七條	宮司	宮司	新榮	宮司	南田附
前田利三郎	日比野宗吾	加納千太郎	中川良太郎	加納善吾	下川挺治	箕浦健吉	渡邊半平	小川源治郎	樋口半治郎	福永政太郎	吉見國之助	田附文彌	那須金治	前田定藏
一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	看護手	上砲等兵	上砲等兵	上砲等兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	功七級	勳八等	勳八等	勳八等
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村宮司
宮司	南小足	大東	宮司	七條	宮司	宮司	加納	榎木	榎木	宮司	加納	加納	加納	宮司
長濱房四郎	宮川角造	西川定吉	中川俊治	中野万次郎	清水清太郎	垣見政治	金澤三郎	藤本有	木村由太郎	清水忠治	高木留吉	加納孝治	加納源七	藤井茂太郎
一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵	一步等卒兵
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村千草
新榮	南田附	宮司	七條	今川	今川	千草	千草	東上坂	東上坂	西上坂	石田	西上坂	石田	石田	南郷里村千草
平居禪亮	前田善吉	川村泰造	杉江小治郎	中川忠太郎	川村正義	西尾喜代松	吉原伊右衛門	長田圭三	三宅源太郎	宮部太三郎	岩崎小太郎	桑原周七	木下甚太郎	小川留吉	南郷里村千草
軍輻重曹兵	軍騎曹兵	軍步曹兵	軍步曹兵	曹長兵	特務曹長兵	砲曹長兵	輪輻卒重	輪輻卒重	輪輻卒重	輪輻卒重	輪輻卒重	輪輻卒重	輪輻卒重	輪輻卒重	輪輻卒重
勳七等	勳七等	勳七等	功七級	功七級	勳七等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村新榮
七條	加納	新榮	小堀	加納	宮司	今川	今川	七條	七條	榎木	榎木	榎木	今川	新榮	
中野爲藏	宮本善四郎	平居六太郎	日比野瀧太郎	金澤捨太郎	福永竹松	川角庄吉	小川松三郎	杉江清藏	中野重次郎	加納政太郎	水森源次郎	藤山清逸	川村忠三郎	西脇熊次郎	
上騎等兵	上步等兵	上步等兵	上步等兵	上步等兵	上步等兵	上步等兵	上步等兵	上步等兵	伍步長兵	伍步長兵	伍步長兵	計二手等	軍砲曹兵	軍砲曹兵	
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等	勳八等	勳八等	功七級	勳八等	勳七等	勳七等	功七級	勳八等	功七級	勳七等	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村南小足
新榮	南小足	榎木	七條	加納	榎木	大東	小堀	南田附	七條	宮司	加納	小堀	宮司	松居與惣太郎
櫻川彦太郎	宮川陸藏	藤田新三郎	杉江靜治郎	宮部太郎助	水森字之助	西川源太郎	日比野盛一郎	北川泰助	川崎伊太郎	菅俣	加納賢治郎	日比野新造	田邊善次郎	
輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二砲 等卒兵
動八等	動八等	動八等	動八等		動八等			動八等						動八等
同	神照村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村七條
國友	南方	南田附	南田附	宮司	宮司	宮司	榎木	新榮	榎木	南田附	七條	小堀	宮司	杉江伊八郎
小林	堤	尾上	前田	松本	前田	中井	藤田	松居	松波	泉	河崎	荒田	川村	川村字三郎
本立	泰造	留彌	要三郎	本與八郎	源太郎	伊右衛門	榮吉	小三郎	庄太郎	清造	德三郎	彌重郎	宇三郎	
軍三	軍三	看護卒	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅	輪幅
醫等	醫等		卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重
	動六等		動八等	動八等	動八等	動八等		動八等	動八等				動八等	動八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村宮司
宮司	大東	小堀	七條	今川	榎木	七條	榎木	南田附	宮司	新榮	宮司	南小足	今川	那賀善次郎	
松宮治三郎	西川源彌	古山利七	樋口與福七	小川龜太郎	藤山兵太郎	杉江新太	北川辰次郎	泉清治郎	川崎傳次郎	金澤甚藏	粕淵定次郎	小國重治郎	小川原次郎		
一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	
動八等						動八等	動八等	動八等	動八等	動八等		動八等	動八等	動八等	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	南郷里村加納	
七條	加納	今川	小堀	南田附	小堀	宮司	大東	榎木	新榮	新榮	七條	今川	加納	加納	
木野德太郎	加納金治郎	小川藤七	古山賢吉	前田周介	荒田彌惣治	徳田爲次郎	田中源藏	加納曜一	金澤愛藏	臣椋半治郎	中尾武七	小川繁太郎	川合甚作	加納惣吉	
一工 等卒兵	一砲 等卒兵	一砲 等卒兵	一砲 等卒兵	一砲 等卒兵	一砲 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一兵 等卒步	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	
動八等		動八等		動八等	動八等				動八等	動八等	動八等	動八等	功動七 八等	動八等	

神照村	國友	澤藤	謙造	新庄馬場	服部市三郎	南方	中貞造	相撲	藤居由藏	國友	川崎友治郎	南方	川瀨卯三郎	新庄中	千田宇三郎	南方	若林宗七	山階	中川壽吉	橋本	小林榮治郎	新庄寺	福島芳太郎	國友	宮地太吉	十里	岩島勘藏	相撲	藤田與三郎	下之郷	平岩德左衛門
曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵
功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	
神照村	口分田	中村清次郎	飯田豐市	八幡中山	池野作藏	新庄馬場	田中喜三郎	中澤	川崎惣五郎	保田	大谷伊平	國友	國友留治郎	國友	西嶋傳三郎	保田	宮野竹治郎	國友	土田喜代藏	八幡中山	林忠太郎	山階	佐藤藤太郎	口分田	廣部佐內	宇野德三郎	高田兵助	下之郷	高田兵助		
長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	長兵	
功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	功七級	

神照村	相撲	藤倉信太郎	口分田	廣部松太郎	南方	堤豐松	國友	西澤源太郎	國友	川崎定吉	小澤	林捨治郎	祇園	松村耕八	祇園	西濱文吉	新庄中	田中鐵太郎	下之郷	平岩嘉十郎	十里	澤居辰次郎	小澤	宮村平次郎	川崎	中井周八	新庄馬場	西川久太郎	八幡中山	大橋幸三郎	
曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	
功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	
神照村	新庄馬場	服部忠作	下之郷	平岩常吉	下之郷	平岩吉太郎	相撲	成田善之助	新庄馬場	福永辰次郎	南方	若林善治郎	南方	川瀨忠五郎	口分田	廣部文三郎	橋本	小林春治郎	今	宇野傳藏	今	辻濱吉	川崎	吉井政次郎	口分田	木村松之介	新庄中	前田重太郎	十里	澤居重治郎	
曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵	曹兵
功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等	功八等

Table listing names and ranks on page 976, including entries like 相撲藤居捨藏, 高橋彦太郎, 高田外市, 高田捨次郎, 德田惣十郎, 宮田平太郎, 高田捨次郎, 中井重次, 小澤宮村勘七, 川崎中井重次, 南方高田捨次郎, 八幡中山德田惣十郎, 保田宮田平太郎, 八幡中山田中嘉七, 口分田木村林彌, 國友大塚宮藏, 國友吉田惣三郎, 口分田飯田八藏, 下之郷横田吉三郎.

Table listing names and ranks on page 977, including entries like 相撲藤居捨藏, 高橋彦太郎, 高田外市, 高田捨次郎, 德田惣十郎, 宮田平太郎, 高田捨次郎, 中井重次, 小澤宮村勘七, 川崎中井重次, 南方高田捨次郎, 八幡中山德田惣十郎, 保田宮田平太郎, 八幡中山田中嘉七, 口分田木村林彌, 國友大塚宮藏, 國友吉田惣三郎, 口分田飯田八藏, 下之郷横田吉三郎, 保田大谷丈太郎, 田中長太郎, 森野久治郎, 市橋岩次郎, 松村佐七, 服部金治郎, 大谷源治郎, 小倉藤太郎, 下之郷小倉藤太郎, 八幡中山藪内吉治郎, 相撲北川喜作, 井上與惣吉, 中川與曾八, 伊吹新八, 福永利八, 新庄馬場福永利八, 南方澤田治郎亮.

同	同	同	同	同	同	長濱町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	神照村
船山石居留治郎	神戸木戸源藏	南船村田次郎	相生辻勝之助	相生伴茂三郎	神戸小笠原憲一	南船中村寅吉	十里片山松藏	保田大谷佐七	山階高山吉藏	中澤清水藤太郎	保田大谷元次郎	山階佐藤淺右衛門	國友齋藤元治郎	國友加藤秀藏	國友加藤秀藏	國友加藤秀藏
軍歩	曹憲	看一護	曹工	曹歩	砲兵少尉	主二	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻
曹兵	長兵	長等	長兵	長兵	計等	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重
勳八等	勳七等	功七七級等	勳七等	功七八級等	勳正六八等位	勳從六七等位					勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	長濱町
大手宮村太四郎	永保小林首次郎	三ッ矢辻清次郎	米川匹田七次郎	北船萩田熊次郎	相生居川外次郎	南片富田祐次郎	三ッ矢今村新太郎	永保小西祥吉	南吳服小川新三郎	船山藤田琢麿	船山藤居淺次	南片川村仙彌	祝大久保巳之助	錦沓水留之助	保田吉田與八	保田吉田與八
上歩等兵	上歩等兵	上歩等兵	上歩等兵	上歩等兵	砲兵	砲兵	看二護	看二護	看二護	軍工	軍工	軍歩	軍歩	軍歩	軍歩	軍歩
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳七等	勳七等	勳七等	功七七級等	功七七級等	勳七等	功七七級等	功七七級等	功七七級等	功七七級等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	神照村
口分田井上庄治郎	川崎吉井甚吉	國友兒玉鐵治郎	小澤國友兵作	岡田坂田清助	小澤月ヶ瀬卯三郎	今上野秀藏	十里岩島利三郎	新庄中田中徳治郎	國友富田勘四郎	南方中川良造	十里澤居源彌	國友佐々生助次郎	八幡中山中山巳之助	相撲北川利介	相撲北川利介	相撲北川利介	
輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻
卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重
			勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等				勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	神照村
八幡中山加藤源七	八幡中山徳田專藏	國友平塚久吉	口分田廣部四良三郎	小澤宮田賢造	山階金澤吉三郎	相撲松居桂三	八幡中山中野權太郎	十里金澤忠太郎	南方若林末次郎	國友笈惣右衛門	祇園松村介三郎	相撲藤居所七	南方田邊政之進	保田吉田與八	保田吉田與八	保田吉田與八	
輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻	輪輻
卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重	卒重
勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等	勳八等

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	長濱町
北吳服	御堂前	東本	南船	三ッ矢	西魚屋	祝	三ッ矢	三ッ矢	御堂前	錦	神前	船山	永保	伊部		
川村捨次郎	富岡七郎平	竹内善次郎	瀨田豊藏	阪東久七	多賀徳次郎	西村重次郎	中島仙太郎	長居新三郎	小倉與次郎	西澤平次郎	牧田喜市郎	阿蘇常吉	伏木保次郎	小松外次郎		
二砲 等卒兵	二砲 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵	二步 等卒兵		
		動八等			動八等				動八等					動八等		

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	長濱町
高田	北船	北吳服	高田	田	田	三ッ矢	相生	八幡	祝	永保	船山	北吳服	大手	相生	相生	
宮川源之介	古川次郎吉	川越房次郎	稻川清太郎	古橋吉三郎	戸田吉次郎	福本定次郎	横田武七郎	北村末次郎	八木庄太郎	北川岩次郎	中西留次郎	池内政次郎	小寺寅吉	中村忠治		
輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	輪輻 卒重	二工 等卒兵	
		動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等		

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	長濱町
北船	北船	北吳服	三ッ矢	北船	北船	南吳服	南船	榮船	御堂前	三ッ矢	神戶	三ッ矢	南吳服	田		
矢盛藤次郎	田中仙次郎	中川清次郎	松村八次郎	矢盛藤七	松橋清吉	伊藤松次郎	西村捨藏	富田音彌	北川吉次郎	伊藤雅吉	川村市太郎	三橋徳次郎	松尾春吉	角田卯吉		
一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵	一步 等卒兵		
			動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等		

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	長濱町
田	相生	大手	大	大	郡上	南吳服	船山	神前	三ッ矢	田	南船	三ッ矢	三ッ矢	田	船山	
西島市次郎	中田猪之助	橋本辰次郎	村田治郎	伊藤留次郎	伊藤留次郎	平山貞次郎	木村幸太郎	西濱太造	木村末吉	淺見又之助	井上宇七	岡村十郎	中村定治郎	北村留次郎	石居幾治	
看 護手	一 等卒工	一 等卒兵	一 等卒兵	一 等卒兵	一 等卒兵	一 等卒兵	一 砲等卒兵	一 砲等卒兵	一 砲等卒兵	一 砲等卒兵	一 騎等卒兵	一 步等卒兵	一 步等卒兵	一 步等卒兵	一 步等卒兵	
動八等		動七等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	動八等	

村名	大字名	氏名	兵科等級	勳章/有無種類	村名	大字名	氏名	兵科等級	勳章/有無種類
柏原村	須川	宮長精一郎	兵二曹	勳八等	北郷里村	春近	大塚吉郎	水一兵	勳八等
同	大野木	西澤新之助	信一號兵	功七級	南郷里村	榎木	榎智染	大海主	從五位旭日章勳六級
同	長久寺	吉田政治郎	機一關兵	勳八等	新榮	吉居與三郎	筆二記	筆二記	勳七等
同	大野木	柴田光三郎	木工兵	勳八等	加納	加納文四郎	機三關兵	機三關兵	勳七等
同	須川	大石清太夫	水二兵	勳八等	同	宮司	青木勘治	水二兵	勳八等
春照村	清水	兒玉忠太郎	水一兵	勳八等	同	同	奧田安次郎	水二兵	勳八等
同	大鹿	山中大助	兵三曹	功七級	同	加納	加納虎積	水二兵	勳八等
同	同	塚本源吉	水一兵	勳八等	神照村	新庄寺	村崎藤七	兵三曹	勳八等
東黒田村	大鹿	奥原勝藏	三關兵	勳八等	長濱町	祝	中澤安治郎	中海尉	從七位勳六等單光旭日章

凱旋軍人一覽表 (海軍之部)

西黒田村	常喜	河村由之助	輪幅	卒重	勳八等	西黒田村	本庄	山本清次郎	輪幅	卒重	勳八等
同	蘭原	尾崎豊三郎	輪幅	卒重	勳八等	同	常喜	中川清松	輪幅	卒重	勳八等
同	鳥羽上	大橋文藏	輪幅	卒重	勳八等	同	常喜	中川清松	輪幅	卒重	勳八等

西黒田村	鳥羽上	清水藤七	一步等卒兵	勳七級	西黒田村	常喜	奥田謙吉	一步等卒兵	勳八等
同	八條	中川捨松	一步等卒兵	勳八等	同	本庄	清水俊藏	一步等卒兵	勳八等
同	名越	引山善太郎	一步等卒兵	勳八等	同	八條	福永巳之	一砲等卒兵	勳八等
同	蘭原	北村賢次郎	一步等卒兵	勳八等	同	鳥羽上	大橋善治郎	一砲等卒兵	勳八等
同	本庄	川添原良	一步等卒兵	勳八等	同	本庄	武田常吉	一砲等卒兵	勳八等
同	常喜	田島兵作	一步等卒兵	勳八等	同	鳥羽上	清水庄吉	一砲等卒兵	勳八等
同	常喜	田中松藏	一步等卒兵	勳八等	同	鳥羽上	時田熊治郎	一砲等卒兵	勳八等
同	本庄	清水兵治	一步等卒兵	勳八等	同	八條	川西文平	一砲等卒兵	勳八等
同	名越	片山圓十郎	一步等卒兵	勳八等	同	鳥羽上	淺尾政次郎	一砲等卒兵	勳八等
同	本庄	清水駒太郎	一步等卒兵	勳八等	同	常喜	田中泰治郎	一步等卒兵	勳八等
同	常喜	宮部儀治郎	一步等卒兵	勳八等	同	鳥羽上	中尾長太郎	一步等卒兵	勳八等
同	常喜	横山林三郎	一步等卒兵	勳八等	同	八條	寺脇仲次郎	一砲等卒兵	勳八等
同	鳥羽上	淺尾留吉	一步等卒兵	勳八等	同	蘭原	池野末松	一砲等卒兵	勳八等
同	八條	寺脇甚三郎	一步等卒兵	勳八等	同	鳥羽上	北村貞治	輪幅	卒重
同	八條	清水半七	一步等卒兵	勳八等	同	蘭原	池野惣太郎	輪幅	卒重

第十四編 文筆志

村名	大字名	氏名	兵科等級	勳章の有無種類
息郷村	番場	若泉吉太郎	二機關兵等	勳八等
同	西坂	久禮隆平	二水兵等	勳八等
醒ヶ井村上丹生	寺田	三男吉	二水兵等	勳八等

第十四編 文筆志

村名	大字名	氏名	兵科等級	勳章種類
息郷村	番場	若泉吉太郎	機二兵等	勳八等
同	西坂	久禮隆平	水二兵等	勳八等
醒ヶ井村上丹生	寺田	三男吉	水二兵等	勳八等

第十四編 文筆志

第一章 和歌

寐物語といふ所にて

太田道灌 (平安紀行)

ひとり行く旅ならなくに秋の夜の寐物語もしのぶばかりに

長比たひくらへにて

一條兼良 (藤河の記)

右左見て過ぎ行けば近江みの二つの山ぞたけくらべする

長比の山といふを見て

兔菴老人 (美濃路紀行)

近江みのいづれ廣きと知らまほしたけくらべする山に間はッや

玉井

冷泉爲相 (權中納言爲相卿集)

おもはずにぬるゝはさとの名もつらしむすはてすきん玉の井の水

柏原にて

同上

おりくだる山の裾野の柏原もどつ葉まじりしげる頃かな

柏原といふ所にて

贈大納言飛鳥井雅世 (富士紀行)

秋寒み下葉色づくかしは原露のみもろく風渡るなり

柏原にて

一條兼良 (藤河の記)

吹く風やまだこぬ秋を柏原はびろかしかはの名にはかくれず

柏原の成菩提院にて相知れる僧に 兎菴老人 (美濃路紀行)

君と我老ての後はあひがたき法のちぎりの朽ちぬうれしさ

梓山 曾禰好忠 (曾禰好忠集)

梓山みのゝ中道絶えしより我身に秋のくると知りなき

能因法師 (千載和歌集)

宮木引く梓の柚をかきわけてなにはの浦を遠ざかりぬる

同 俊頼朝臣 (散木)

杜鵑あづさの柚の柚人に聲うちそへて宮木引てし

同 藤原信實 (夫木和歌抄)

柚たてみ引やまさきのつなこしにさこそ梓の山とよむらめ

醒井にて 前河内守親行 (東關紀行)

道のへの木かけの清水むすぶとてしばし涼まぬ旅人ぞなき

同 阿佛尼 (安嘉門院四條) (十六夜の日記)

むすぶ手に濁る心をすしぎなば浮世の夢もさめが井の水

同 冷泉爲相 (橋中納言爲相納言)

河どなる末まで清し岩間よりあまりて出づる醒井の水

水邊月 醒井 鎌倉右大臣源實朝 (夫木和歌抄)

わくらははに行きても見しか醒が井のふるき清水にやぞる月影

醒井にて 參議雅經 (明日香井和歌集)

思ひゆくその面影に袖ぬれてむすばぬ夢もさめが井の水

同 攝政良基 (小島の口すさみ)

今よりやうかりし夢もさめが井の水の流れて末をたのまむ

醒井と申す所にて 贈大納言雅世 (富士紀行)

君が代は流れも遠しさめが井の水は汲むとも盡きじとぞ思ふ

醒井にて 堯孝法師 (覽富士記)

汲みてこそ浮世の夢もさめがるのみづから清き心知らるれ

同 二首 一條兼良 (藤河の記)

夏の日もむすべば薄き水にてあつさややがてさめがるの水

岩が根をわかれて出づる醒が井の流れや終にあふみ路の末

醒井の里にて濁膠といへるを飲みて 仁和寺尊海僧正 (あづまの道のこと)

あしけれどのみてなほさむ二日酔今日さめが井の水臭き酒

醒井 中務卿 (名寄)

汲て知る人しもあらば醒井の清き心をいのちとやみん

丹生川 源兼康 (新千載集)

いかにせん丹生の川波寄だにもかよはぬ船のうきな那がさむ

能登瀬川 波多少足 (萬葉集)

さゝれ波磯こせちなる能登瀬川音のさやけき瀧つ瀬毎に

同 讀人不知 (萬葉集)

高せなる能登瀬の河の後にあはむ妹には吾れは今ならずとも

番場さめが井のはどりにて 正 徹 (なぐさめ草)

岩根もる清水に春の面影をとめてやかへる松の藤浪

番場を物の名にとりなして 一條兼良 (藤河の記)

分くる野のまだ末遠き草葉には日かげの駒よしばしとゞまれ

番場の宿にて

太田道灌 (平安紀行)

やすらは馬立なべて番場つかひせこが心も妹に見せんかも

摺針峠にて 堯孝法師 (登富士記)

心せよ行きかふ旅のもろ人も袖すりはりの山のかげ路ぞ

摺針にて都の山もかくれぬる 正 徹 (なぐさめ草)

今ははや目にもかゝらずふる里の都の山は雲がくれつし

摺針峠にて 一條兼良 (藤河の記)

旅衣ほころびぬれやすり針のたうげにきてもぬふ人のなき

摺針峠にて斧をすりて針になせしてふ故事を思ひ出でし 兎菴老人 (美濃路紀行)

思へた人ハ心のあしきをもよきをも常にみがくべしとぞ

西行塚にて 一條兼良 (藤河の記)

いかにして松の陰には宿るらむ花のもとしかいひし言の葉

小野 冷泉爲相 (攝中納言爲相卿集)

湖も都の山も見えそめてさか越えくだる小野のふる道

小野宿にとまりて

宗尊親王 (名寄)

浮身世に色かはり行く淺茅生の小野のかりねの袖ぞ露けき

小野といふ所にて

参議雅經 (夫木和歌抄)

忘れつゝこれも夢かとおどろけば馴れぬ旅寐の小野の山風

小野と申所にて紅葉を見侍りて

贈大納言雅世 (富士紀行)

旅衣もみぢのぬさもとりあへず都のにしき又やかさねむ

小野の宿にて

堯孝法師 (覽富士記)

吹きにけり分く行く袖の露霜も身にしむ秋の小野の山風

小野にて

一條兼良 (藤河の記)

枕ゆふ小野の小篠の短夜も旅にしあれば明しかねつゝ

小野にて述懐の心を

正徹 (なぐさめ草)

いかにせん小野の山柴ことたえてなを立てかぬる宿の烟を

小野の宿にて

兎菴老人 (美濃路紀行)

いく夜われ葎の宿をかりつらむつゝに妹どしいねぬものゆゑ

小野

藤原定家 (拾遺集)

夢かども里の名のみや残らん雪も跡なき小野の淺茅生

原の岡山

九條内大臣 (夫木集)

木づたひて梢の蟬も鳴くらし青葉かさなる原の岡山

同上

西行法師 (山家集)

朝歸るかりいそ那古の村鳥は原の岡山こしやしぬらむ

羈旅歌 磯崎

高市連黒人 (萬葉集)

いそ崎をこぎたみ行けば近江の海八十の湊に鶴さはに鳴く

磯千鳥

信實朝臣 (夫木和歌抄)

風さゆる八十の湊のあくる夜に磯ささかけて千鳥なくなり

堺の入江(文永十年毎日一首の中に)

民部卿爲家 (夫木和歌抄)

さいなみや堺の入江影見えて旅人通ふ濱の細道

梅原

藤原俊成 (歌枕)

春の日の光はきはもなけれども先づ咲く花は梅原の山

朝妻 大誓會歌

平兼盛 (兼盛集)

あさづまのみゐのこの影茂り合ひて榮えにし代を見るが樂しさ

同 治承三年右大臣家歌合

をちかたや朝妻山にてる月の光を寄する志賀の浦波

初春歌

家長朝臣 (夫木和歌抄)

こほの海やあさ妻舟も出でにけりつなぐこほりを風やとくらん

題知らず 二首

西行法師 (山家集)

おぼつかな伊吹おろしの風さきに朝妻船はあひやしぬらん

くれ舟に朝妻わたり今朝なよせそ伊吹のたけに雪しまくなり

後朝隠戀を

藤原為忠 (新續古今和歌集)

戀ひ〜て夜はあふみの朝つまに君もなきさといふはまことか

湖雪

藤原為尹 (爲尹卿千首)

雪はまだ朝妻舟にふりつまでかるげに見ゆる浦風ぞふく

朝妻に舟着して

一條兼良 (藤河の記)

はの〜と朝妻にこそつきにけれまだ夜をこめて舟出せしまに

朝妻の浦にて

尊海僧正 (あづまの道の記)

見し夢のあさづま舟のたちかへる涙ばかりを袖に残して

朝妻 二首

柿本人丸 (萬葉集)

今日行てあすはこんといふ子鹿に朝妻山に霞たな引

子らが名につけのよろしき朝妻の片山岸にかすみたな引

同上

時房 (夫木和歌抄)

夜をこめて春は來にけり朝妻や片岡山にかすみたなびく

同上

後京極攝政 (夫木和歌抄)

朝妻やをちの外山に出づる日の光をみがくしがの浦波

同上

伴蒿溪

あはれなりさして寄る邊もなみ枕淺妻舟のうかれ妻はも

筑摩

笠郎女 (萬葉集)

つくま野に生ふる紫きぬにそめ未だ着ずして色に出にけり

題知らず

讀人不知 (伊勢物語)

あふみなるつくまの祭とくせなむつれなき人の鍋の數見む

寄社戀

藤原清輔 (清輔集)

夜どどもに涙をのみぞながすかなつくまの鍋に入らぬ物ゆゑ

永承六年五月五日殿上の根合によめる 良 暹 法師 (後拾遺和歌集)

筑摩江の底の深さをよそながら引ける菖蒲の根にて知るかな

女のもとに遣しける 藤原道信 (同 集)

近江にかありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼

題知らず 公朝朝臣 (夫木和歌抄)

つくま江の沼江の水や深かりし人くるしめの菖蒲引くなり

御あが物の鍋をもちて侍りけるを藤原顯綱臺盤所より人の

乞ひ侍りければ遣すとて鍋にかきつけ侍りける

おぼつかな筑摩の神の爲めならばいくつか鍋の数は入るべき

つくまにて 尊海僧正 (あづまの道記)

とくせなんつくまの里のはたごいひつれなき人は鍋もたかずや

筑摩祭 三首 長野主膳 (淡海舊跡考)

歌に女つれなき人のさる鍋の黒く見ひければ古

いくばくの胸のはむらにこがしけむかつくかなへの底すしけたる

同 へばすて女の中ひいを古しへの傳になりて名を問

つくまがたをちの小菅の根も見すて誰がためかつくかなへなるらん

雨ふりければみのはぶさなご着

かくれ簀かくれ笠をやきたるらん鍋の数をば人にみえじと

同上 眞佐比 (續詞花)

筑摩女に鍋かつかせていましめの神の恵をかぞへやはせむ

同上 俊頼朝臣 (後拾遺集)

如何にせん筑摩の神も埋れてつみなん鍋の數ならぬ身を

同上 左京太夫 (續詞花)

朝なべの心ちこそすれ千早振つくまの神の祭りならぬぞ

同上 詮 村 (淡海落穂草)

こしろせよつくま祭の鍋の數かさねば墨に顔やよごれ舞

額田二首 讀人不知 (萬葉集)

さぬかたは實にならずとも花のみもさまで見えこそ戀のなくさに

さぬかたの野邊の秋萩時しあれば今さかりなり折りてかささむ

息長 馬史國人 (同 集)

鴉鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむことつきめやも

譬喩歌

讀人不知(一説柿本人丸) (同集)

しなてる都久麻さぬかた息長のをちの小菅あまなくにい苺り持ちさ敷なくにいかり持ち来ておきて我をしぬばす息長のをちの小菅

横川 冬歌の中

民部卿為家 (夫木和歌集)

さゆる夜のよがはの水の薄こほりとけすなり行く冬の空かな

長澤 題知らず

藤原俊成(一説讀人不明) (夫木和歌集)

君が代の長きためしに長澤の池のあやめは今日ぞ引かる

屏風の歌

能宣朝臣 (夫木和歌集)

長澤の池の底なる龜までもおのが齡を君にとぞ思ふ

長澤

藤原顯輔 (同集)

年ごとに絶へず引くかな菖蒲草根も長澤の池をたづねて

天祿元年大嘗會風俗歌

平兼盛 (拾遺和歌集)

近江なる彌高山の櫛にて君が千代をば祈りかざさむ

彌高山

曾根好忠 (夫木和歌集)

さゝれ石のいはほどなれば近江なる彌高の峰いやたかになる

天仁元年大嘗會

大江匡房 (同集)

蟬の聲いや高山の木のしたや旅行く人の宿りなるらむ

伊吹山 百首歌奉りける時

衣笠右大臣 (新拾遺和歌集)

さしも草さしもひまなき五月雨に伊吹のたけの猶やもゆらむ

女に初て遣しける

藤原實方 (後拾遺和歌集)

斯くとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじなもゆる思を

題知らず

曾根好忠 (續古今和歌集)

冬深く野はなりにけり近江なる伊吹の外山雪降りぬらし

郭公聞きつるといふ事を

藤原為忠 (藤原為忠朝臣集)

伊吹山おろせる風に聲こもり定かならねど聞くほととぎす

寄伊吹山戀

順徳天皇 (順徳院御集)

玉かづら伊吹の山の秋の露誰おもかげの松虫のこゑ

同上

僧正行意 (内裡名所百首)

夕附日さすや伊吹のさしも草露にもゆる色は見へけり

同上

藤原定家 (同集)

秋をやく色にぞ見ゆる伊吹山もえて久しき下の思に

同上

藤原家衡 (同集)

梢まで伊吹の山のさしも草いかにもえつゝ秋の色に出づらむ

同上

俊成卿女 (同集)

さしもやは身にしむ色も伊吹山はげしくおろす峰の秋風

同上

兵衛内侍 (同集)

さびしさをいかに伊吹のさしも草さしもつれなき秋の夕ぐれ

同上

藤原家隆 (同上)

色深き伊吹の山の紅葉かなおふらむ草もさしも枯れしを

同上

忠貞朝臣 (同上)

袖にみつ峰の嵐の伊吹山さしも露ちる秋のならひは

同上

知家朝臣 (同上)

つらしとは誰もいぶきのさしもなど待れて出づる山の端の月

同上

範宗朝臣 (同上)

雲はらふ伊吹の山の秋風を待ける月のありわけの空

同上

散位行能 (同上)

秋はさぞふくる伊吹の山風をならす顔にも鹿の鳴くらむ

同上

藤原康光 (同上)

吹きすてゝ風は伊吹の山のはをさそひて出づる關の藤川

題知らず

大納言通具 (續後拾遺和歌集)

さても猶えやは伊吹の下草の跡なき霜に思ひ消えなむ

秋の歌の中に

寂縁法師 (續後撰和歌集)

よど共にもえて年ふる伊吹山秋は草木の色に出でつゝ

百首の歌の中に

中務卿親王 (續古今和歌集)

伊吹山峰なる草のさしもこそ忘れほどまで契り置きしか

寄山戀

太宰権帥爲經 (新後撰和歌集)

夜と共にもゆともいかに伊吹山さしもつれなき人に知らせむ

毎日百首の歌

民部卿爲家 (夫木和歌抄)

さゝなみやうらよりをちを見渡せば伊吹のたけにかゝる村雲

野上にて

飛鳥井雅有 (隣女和歌集)

雪白き伊吹の山を目にかけて野上を行けば嵐寒けし

伊吹山を見て

飛鳥井雅親 (亞楓集)

雪げとも知らぬ伊吹の峰の雲晴れてぞつもる程を見せける

伊吹山

道堅法師 (道堅法印百首)

さい波やにほの浦風末はれて伊吹のどやま月高く見ゆ

伊吹山を望みて

飛鳥井雅縁 (宋雅道す
がらの記)

伊吹山さえせぬ雪はうづめども名高き峰はかくれざれけり

伊吹の山のふもどにて

菟菴老人 (美濃路紀行)

今よりや更に伊吹の山おろし冬をも待たぬ秋のはげしさ

伊吹山

寂身法師 (寂身法師集)

こがらしの伊吹の山のもみぢ葉や裾野の秋の色をそふらむ

伊吹山を見て

尊海僧正 (あづまの
記)

風さゆる空は日かげのさしながら伊吹おろしや雪と降るらむ

伊吹にて

前參議時慶 (前參議時
慶集)

わきて尙寒きあらしの伊吹山旅のころものやつれのみして

伊吹山

牡丹花宵柏 (春夢草)

長月の伊吹の山の山嵐にこしのみそらの雪ぞ打ちちる

長濱

竹中重治 (豊鑑)

君が代も我が世も共に長濱の眞砂の敷の盡きやらぬまで

平方

近江毛野臣妻 (日本書記)

ひらかたゆ笛吹きさのぼる近江のや毛野のわくこは笛吹きさのぼる

坂田稻春歌

藤原俊成 (新古今和歌集)

近江のや坂田の稻をかけつみて道ある御代の初めにぞつく

同上

齋藤親基 (齋藤親基日記)

世々こゆる君が千とせのためしには坂田の稻の初穂をぞぬく

仁孝天皇大嘗會屏風歌 三首

藤原胤定 (以寧卿記)

梅原花樹盛開行人見之

ゆく人もめでてぞ過ぐる梅の原なにおふ花の深き色香を

朝妻山櫻漸開

ひもどきし朝妻山のさくら花霞をわけてかをりそめける

筑摩江採菖蒲

つくま江にしげるあやめの長き根を君が八千代のためしにぞ引く

鳥居本神教丸

秋里 籬 島 (近江名所圖繪)

くれなるの花にいみじくおく露も薬にならひ赤玉といふ

長濱八幡宮御祭の日詣でし

廣前にて 賀茂 季鷹 (八幡社文書)

流れての世にも絶せぬ石清水あふげばいよしたかき神垣

同 倭 文 子 (八幡社文書)

神祭りをろがむのみか長濱に名も長月の月を見るかな

千界山百首之内七首 僧 慈 芳

能登瀬川ながれてはやくふちせにもなるればやすく遊ぶ水鳥
はる霞朝妻山にたなびけと猶かせさむて淡雪ぞふる

久さくのさしもたへせぬ秋よりもるやはいぶきの雪の夕暮
かく計り道あるみよにあふみのや坂田の早苗どれとつさせず

よ所めにもそれぞど里の名もしるしちらぬ青木の森のときは

君が代をあふげばいと彌高のやまの神はかげぞしげれる

梓山みねのひはらに柚たてゝあまの川瀬に引くだすなり

後鳥羽天皇の古事をいひつたへし近江國なる坂田郡に建碑

のことあるをさきて 福 羽 美 静 (後鳥羽神社
々々藏短册)

あふみちや坂田にのこるふることを千代につたふる事のかしこき

後鳥羽神社の創立を祝して 徳 大 寺 實 則 (同 上)

御おもひも終にとけねと明らかに治まる御代をみそなはずらむ

宇賀野の森にて 後 鳥 羽 院 (窓のすさび)

神風やみもすそ川のあとたれしうかの森の神ぞたうとき

名超の行在にて 同 院 (同 上)

すみわびて身をかくすべき山里にあましくまなき夜半の月影

加田の里にて 同 院 (同 上)

植置て後のかたみとなす梅は色香妙なる法の庭もせ

筑摩浦にて 同 院 (同 上)

筑摩江やいその藻林すぎ行けば名超の森や遠くなるらむ

青木の里

讀人 不知

こがらしの風は吹けども散らすして青木の里や常盤なるらん

鶯の原

太田 道灌 (東海記行)

聞くまゝにかすみし春ぞしのばるゝ名さへなつかし鶯の原

同

能因 法師

旅やどりゆめ醒井のかたほとり初音も高しうぐひすがはな

同

堯孝 法師 (覽富士記)

里の名に聞く鶯のはなかつら秋はすくなし春かけてなけ

梅ヶ原にて

辻村 敬甫 (蓬垣集)

さとの名も猶こそ匂へ梅が原花ちりはてし春の後にも

同

同 人

暮て行秋をもまたで伊吹山冬や來にけん今朝の白雪

第二章 詩

柏原山寺 (清瀧寺)

釋 六 如

丁字橋南十字沙、前山開日欽餘霞、紅殘鳥柏村邊樹、紫吐欺冬水際花、
鹿度氷溪蹄跡陷、鶯翹風渚頂絲斜、詩材畫料無人拾、一段荒涼也耐嗟、

題清瀧寺

澤 維 顯 孚 所

瀧山千歲寺、幽邃絕塵氛、塵臥階前草、龍吟洞口雲、寶池沈塔影、
琪樹帶烟薰、定見講經日、天花落自紛、(濟勝具 卷四)

柏原驛即事

太田 翠 巖

行樂不同行旅心、傾杯驛舍散幽襟、明星峯下春將盡、惠日山頭花正深、

永明寺垂絲櫻

號 燕山

同 人

烟霞深染碧山邊、絕世垂櫻拂梵筵、枝帶香風常錯亂、花迎惠日轉嬋娟、
水紋百尺生初地、雲錦千尋落半天、象外相逢多少客、春心繫得共周旋、

醒井驛

同 人

山際驛亭煙景昏、清泉日夜溢仙源、靈蛇跨嶽知何歲、行客于今仰武尊、

番 馬

室 直 清

變輿曾駐野亭中、四百官軍同日空、惟有傷心蔓草色、千秋猶帶血痕紅、

磨鏡嶺眺望

一 條 兼 良

南行數里下陽坡，西望平湖遠不波，孤島屹然何所似，琉璃萬頃一青螺。

過磨針山

僧 義 堂

行到磨鍼最上峰，一湖春水浸天容，昨擡稍覺王居近，五色雲浮喜氣濃。

磨針嶺

松 永 尺 五

溪轉峰圍行窮雨，餘添碧水村中，磨針嶺下仰纖路，寂々無人秋草濃。

磨針亭

釋 若 霖

旗亭傍翠巒，烟霧日高乾，木落江天濶，鴻鳴越塞寒，朔雲追去旆，晚照下征鞍，歸路忘幽昧，渺愁猶倚欄。

過磨鍼嶺 二首之一

釋 六 如

勝槩江爲最，此樓收一州，風煙幾雲夢，螺黛小瀛洲，萬象明浮水，四時清似秋，化工安可敵，賦筆意宜休。

同 上 二首之二

落日憑軒久，愛看佳麗鄉，鷺飛山杳杳，帆去水茫茫，今夜月應好，貧程客自忙，安當脫塵鞅，濯足弄湖光。

題望湖堂

戊辰季夏朝鮮通信正使澹窩

危亭費我一高吟，無數帆檣湖水深，僕御休憩西日暮，竹生嶋畔尙輕陰。

同 前

戊辰季夏朝鮮通信副使竹裏

嶺路逶迤一線通，巖巔小閣勢凌空，岳陽形勝誰多少，百里琵琶湖在眼中。

同 前

戊辰季夏朝鮮從事客蘭谷

六月東華客，歸衫振此樓，平生湖海相，度得異邦遊。

戊辰正月九日發京急歸大垣城

小 原 鐵 心

路到磨鍼感忽生，馬頭遠水夕陽明，掃除天下兵塵了，與此湖光一碧平。

磨鍼嶺

三 上 默

山樓獨偶此登臨，汀綠岸紅春色深，忽有片雲來過眼，半湖斜照半湖陰。

摩針嶺晚望 五首

太 田 翠 巖

萬古鐘靈淡海中，地形全與洞庭同，三千餘頃波瀾穩，六十九亭道路通，韓客琉人留手澤，吳江楚嶺讓天工，晚來消熱堪臨眺，涼動蒹葭一水風，層樓六月鬱蒸稀，極目寰籟與不違，獨鳥聲高與雲去，孤帆影遠任風歸，鷺汀鷗渚沙敷玉，柳岸蘆洲浪浸幃，縱使湖南跨八勝，何如此地對斜暉，摩針嶺上渺茫間，指點平湖不下山，日落炊烟橫北渚，雨休漁笛響西灣。

千盤坂道人猶過、百尺欄干客未還、欲向笙洲問天女、暮雲深鎖玉孱顏、
亭子亭々倚驛松、登臨今日悠心胸、湖分內外斜陽映、山接東南積翠濃、
對水漁村催夜火、隔溪蕭寺送昏鐘、不唯佳景留詞客、香餅盛盆酒滿鐘、
烟霞爲性舊詩僧、生長湖中屢此登、微醉先秋迎爽氣、清吟向晚絕炎蒸、
金龜郭隔山如畫、竹馬江隣水似綾、更有銀波開一半、商量後嶺月輪升、

磨針嶺 蘭 芳 軒

寒烟橫竹嶋、素月照琵琶湖、呼酒此吟眺、使吾入畫圖、

同上 龜田 鵬 齋

樵客與漁翁、俱住山水裏、展觀山水圖、還言奇絕地、

矢倉觀梅 三 上 默

溪橋野店舊相知、重值梅花開遍時、一醉不須新作句、又刪草草昨遊詩、

鳥居本 松 永 尺 五

心足人生塵淡休、浮雲富貴識無由、美看圃國佳山水、修竹茂林魚鳥遊、

小野宿 同 人

行路四顧一村清、不少時留信步征、小野宿邊聽名久、初來勝境我心平、

從米原趣澤山舟中作

釋 若 霖

晨乘米浦船、蕩漾麥坡前、苜帶牽鷓夢、荻芽上鷺肩、釣竿孤嶼雨、
耕笠半汀烟、久有滄洲約、浪遊期數愆、

米 原 無 名 氏 (邊路記行)

稼穡艱難民遂生、驛郵聞喜米原名、一犁雨霽好風景、處々湖田半就耕、

伊吹春雪 皆 川 淇 園

九月北湖寒、朔風動日夕、曉看伊吹峰、一點雲端白、

伊吹山 高 井 對 雲

依々山色拍天高、隔斷江濃如怒濤、妖氣銷沈年已久、追懷日本武尊豪、

太平寺 無 名 氏

夜來雲雨屢驚夢、起啓書窓望曉天、一帶湖山猶未雪、膽吹峰上獨喟然、

詣觀音寺途中口號 (丁未夏五月二十日) 僧 六 如

梅霖乍霽淡朝暎、兒子透簾郊色分、僧舍傍山茶鼓響、人家隔竹午鷄聞、
低田爭落高田水、近郭遙吞遠郭雲、何意十年紅軟脚、於焉步々出塵紛、

長濱春望 伊 藤 垣 庵

春風千里過湖傍、拍岸餘波濺客衣、浩蕩天隨山盡處、依稀島在水中央、
鷗聲隔霧聞纔辨、帆影入雲認却亡、驛路馬蹄倉卒去、不能留賞苦相望、

伊吹山

大岡 笙洲

百里傑然群嶽魁、尋常履底聽輕雷、靈叢採藥瘵民疾、神劍鎮妖無獸災、
溟海遙周三越盡、太湖近接五畿開、堪哈入定雲根佛、猶待人間酒一杯、

國友茶仙太愛菊菊以閏至初冬中旬盛開因見招時

大岡松堂歸自遠遊亦同諸伴來觀焉、 三 上 默

茶仙窟裡菊方開、適有遠人歸到來、冬暖香猶招晚蝶、節過影欲接寒梅、
年年難得君同賞、種種不知誰與裁、頗喜此非偶爾如、今良會汝為媒、

磨鍼嶺

梁 川 星 巖

左折右盤行漸高、磨鍼嶺上坐松濤、朝來已背琵琶面、復向林梢見半槽、

九月廿六日發彥根是夕宿番馬驛 同 上

江湖留寓好、有底又但征、五十二郵舍、一千餘里程、山輿搖夢仄、
驛火隔雲明、且喜今霄宿、猶聞遠浪聲、

姊川夜歸所見

紅 蘭 女 史

村徑風微暮氣香、林梢春月澹無光、不知雪藥花開遍、只道佳人倚晚妝、

姊 川

小 原 鐵 心

中原兒輩有何謀、謾向棟梁為敵讐、回首二會空日骨、雙川滾々到今流、

己丑暮春廿二日、同星巖詞兄、紅蘭女史及諸子

遊長濱城墟分得韻齊

太 田 翠 巖

江舟載酒驛亭西、行向城墟望欲迷、翠柳拂磯疑捲幔、蒼波衝岸怪鳴鷗、
弄春花下無人散、弔古松蔭有客題、猿面豐公何處去、經年空作老狐棲、

豐臣氏古城墟

梁 川 星 巖

三月山櫻爛漫開、豐公墩上賞春來、人生有酒真堪樂、冥路無花實可哀、
弱吐強吞同已矣、功名富貴共悠哉、青衫書客多情在、酌汝花前酒一杯、

綠飲樓廿四景詩

綠飲樓は長濱町の人故吉田作平翁の樓名なり、翁生前樓の眺望二十四景を選び、
名家の吟詠を需めたり、當時の名家贈る所、其景本郡に限らざるも、諸名家の作中
より各、其二三を抜記して、二十四景とし、左に加ふ(行幸啓志参照)

平郊桑拓

草 場 船 山

湖光瀾如海，郊樹帶平田，莫是滄波變，蒼茫桑拓烟。

三上夕暉

山秀美堪愛，芙蓉出水中，夕陽借餘景，玉顏帶淡紅。

芦汀魚斷

東斷連西斷，回波寒碧激，蘆花白於雪，魚子潔如水。

姊水宿烟

姊水何處在，惟看姊水流，相思無可寄，烟鎖渡頭舟。

靈山大月

靈山夜色明，雲盡湖天靜，滉漾一輪浮，金波三萬頃。

柳港客帆

夕陽明在水，垂柳綠於烟，依稀布帆影，不見去來船。

比良曉霽

峰雪曉玲瓏，西山春尚淺，何如僅隔湖，東岸隔波暖。

龜城淡靄

萬松凝老翠，峻雉是龜城，淡靄不遮盡，依微粉蝶明。

磨針浮嵐

半嶺合嵐影，模糊翠黛浮，恍疑屐吹氣，空際現層樓。

古城樹影

形勝百代地，功名千古心，鬼雄無可吊，遺墟林樾深。

幽寺鐘聲

夕市人奔忙，風塵欲漲地，獨爲幽寂音，疎鐘何處寺。

冲島疎燈

夜靜濤聲絕，秋寒烟影凝，幽境誰所住，疎々數點燈。

笙洲歸鷺

夕陽湖面潤，風水晚冷冷，群鷺數行白，孤洲一點青。

膽峯積雪

皎々五千仞，膽峯積雪晴，樓窓不能夜，寒色逼人明。

七尾雲峰

早天熱如焚，七麓忽生雲，突凡不成雨，奇峰空成群。

淺渚孤蒲

巖谷 一六

菰短可藏鷓，蒲長時露鷺，小舟膠不行，淺渚褰裳涉。

龍溪飲蛻

同

人

神龍之所潛，溪水深且廣，一飲可驚人，長蛻光萬丈。

日枝晴翠

岡

鹿

門

寂山畿甸鎮，直與霄漢摩，蒼々又鬱々，千秋瑞氣多。

賤岳奔雷

岡

本

黃石

七勇扶山勢，刀槍如閃電，猛雲起怒雷，似見當年戰。

八幡花雨

森

春

濤

春祠啼錦鳩，雲接夕陽鳩，遊屐歛無聲，落花紛如雨。

堅田釣艇

同

人

釣艇來無數，伊啞柔鱗鳴，秋遠蘆花水，依稀落雁聲。

天漢春流

同

人

桃花微雨歇，楊柳淡烟浮，訝看天漢上，雲錦濯春流。

大嶼僧樓

大

沼

枕山

禪樓架嶼高，百尺茫茫裏，不見一緇衣，紅欄臨碧水。

磯岬餘霞

同

人

夕照沈洲背，細沙妍且美，依稀小謝詩，俄頃散成綺。

春日遊觀音寺

辻

村

篤

春風尋律院，處々鳥聲忙，梅柳從初地，煙霞鎖上方，座忘賓主靜。

談涉古今長，一椀雲芽味，無心問酒觴。

春過總持寺

辻

村

修

總持初地外，竹木繞爲林，精舍臨池列，醫王鎖戶深，梅紅分色界。

柏翠會禪心，吾性貪閑寂，徘徊到夕陰。

春日訪神照寺得風字賦呈壽山禪師

辻

村

篤

寂歷無量院，鶯歌入晚風，松從初地綠，梅擁上方紅，啜茗談難盡。

聞鐘心欲空，袈裟如問我，共醉杏林中。

天河即事分韻

同

人

天河春水映霞流，鳥鵲橋邊芳艸稠，窈窕佳人行拾翠，還疑牛女二星遊。

趣番場途中

同

人

黃鶯呼友篋川濱，石徑迷來問野人，草綠花紅如織錦，慇懃看取一年春。

番場驛

同

人

古驛春深鎖彩霞、青帘翻處馬聲譁、前途縱有崎嶇險、欲問蓮華寺裏花、

同

人

綠水廻村草若茵、扁舟一片釣漁人、即今原上煙霞色、孰與梅花二月春、

同

人

吟行極目暫徘徊、楊柳洲邊夕照催、萬頃微茫波不駭、扁舟無數掛帆來、

同

人

梅花欺雪幾千株、占斷芳陰倒玉壺、瘦嶺亦應讓斯地、林溪一樣白模糊、
林似羅浮悉是梅、梅花深處醉忘回、春風一陣香薰骨、恍見佳人伴我來、

同

人

促織聲譁水秋、獨懷千古立橋頭、地轟往昔屯兵馬、天朗通霄沒斗牛、
楊柳堤邊燐火閃、蒹葭汀上露華稠、英雄戰死魂何在、明月于今照鬪樓、

後鳥羽神社

菊池

三溪

蜚雨蠻烟夢未圓、蒙塵天子幾屯還、太湖十里御魂穩、不比驚濤雲蹴天、

土井

香國

醒井

神孫英武舊蹤存、一劍霜威定葦原、却斬毒蛇無漢祖、化成白鳥有丁魂、
千秋醒井泉心淨、萬古吹山雲氣昏、召伯所憩苔石綠、居民奉祀紀慈恩、

過柏原驛有懷源中納言具行卿用其臨終偈韻心

中島

介山

身殉國難英烈傳、天恩尙關中興年、尤哀丘墓世人掃、轉使行人淚潸然、

同

人

介山傍近八勝境、詠息長王丘、誰知神后發祥地、在此山村蒼樹間、

同

人

花落烏啼春已殘、壽王墳外壽川潺、仲算欺罔鈴屋謬、恨無人一雪重冤、

同

人

膽吹山下古荒原、居窟靈泉醒武尊、沙明松翠映漣漪、鐘鼓聲喧湖畔祠、千年古典尙依例、兒女蒙鍋行祭儀、

同

人

蕭條山驛連山寺、云是賊徒窮死地、想見當年皇子軍、錦旗和凱翻嵐翠、

同

人

登攀嶺上老杉陰、滿目山川感更深、木倉仙童寺何處、密雲茂樹洩鯨音、

遊蓮華寺寺六波羅將軍戰死之地也

河路 驪山

石徑通林樾，禪扇絕世暎。地幽心自靜，山近日仍斜。古苑綴芳草，殘碑留落花。啼鴉如有恨，使我感情加。

望湖堂

同人

山閣臨湖靜，敲欄只叫奇。唵邊皆是畫，眼底盡真詩。雲氣連三越，水光接五畿。閑愁時一洗，目力極天涯。

丹生口占

同人

喬木森々嵐翠堆，奔流激石響如雷。山中五月春猶在，巖上櫻花爛漫開。

磨鍼嶺望湖堂

杉本 鳩莊

大江晴開不生烟，俯視南端與北邊。山入五畿青未了，水涵三越碧相連。長沙盡處樹如薺，孤鶴盤時帆黏天。愧我蹉跎功未就，何日去泛范蠡船。一抹松嵐脚底飛，登臨獨立振征衣。天風入閣窻三面，烟髻壓湖山四圍。放眼乾坤氣殊壯，回頭人世事皆非。雄藩遺跡仍堪望，隱約孤城出翠微。烟霞痼疾不曾瘳，竹杖芒鞋漫勝遊。十歲空持江海志，半生誰伴鷺鷥儔。透迤山逗斜陽麗，淪灑波明曲檻浮。猶看昔人題詠迹，風光敢讓岳陽樓。

赴丹生養魚場途上

河路 淡海

古木嶮巖當路奇，溪邊停杖立多時。重巒一碧倒涵影，魚逐奔流上嶮巖。

豐公城趾

同人

城墟沒荆蕪，吊古感滄桑。唯是祠前樹，綠陰長鬱蒼。